始

31-597

外務省圖書館藏

活きて働く三寸の舌鋒

交際談話術

蘆川忠雄譯

大正
7. 3. 29
内交

交際談話術序

人の世に立ちて成功を奏するものは、必ずや學問、才能以外に於て卓絶するものなくんばあらず、日常普通の談話の如きは、人往々無意味にて口に任せて語り、舌に任せて談じ輕々に附すと雖も、是れぞ最も注意と修養を要するものならずや、蓋し談話は意思の花なれば他人の感情を左右するに至大の勢力あるものなり、

而して談話の修養には必ずしも外部口舌の錬習のみにあらずして、人の内心より出づる品性、淑雅、優婉に適應するにあらざれば不可也、故に蘇秦、張儀、デモセニース、ピット、ヂスレリイの如き豪傑流雄辯法の研究とは異れるものにて、今日文明社會に立ち、交際場裏に出入して成功を博するの要素たるものなるのみならず、眞個の意味に於ての紳士淑女として欠くべからざるものなればなり、人往々優婉淑雅を以て、

優柔不斷、長袖者流の行爲となし、甚きに至りては之を以て高襟者の亞流と謬想し、眞個勇敢俠義の士が此の美德に富めることを認めざるは豈に長嘆に堪へざらんや、予の此感を懷くや茲に年あり、頃日刊行の萬朝報を讀むに、拜天生なる人あり、同紙上に於て頻りに優婉淑雅を論じて我國人が此の美德を欠くを慨する深し、予於是乎前言の愈々適切なるを認むる也

昨年初秋予閑を得て友人荒木和一氏を訪ふ、氏

雜貨店を開き敏活なる商業を營むの餘暇、深く歐米の文學に趣味を有せり、其流暢自由の英語にて談するを聽ては、殆んど外人に接すかを疑はしむ、談東西の文藝に及び黃昏に迨んで予將さに辭し去らんとす、氏偶々一本を示して曰く是れ予か往年米國滯留中、紐育市の某古書店より得たる珍本なりと、披て之を閲するに說く所嶄新奇警頗る予か宿說に合するものあり、因て氏に請ふて借覽を求め、歸宅後通讀數回、卷

の盡くるを惜む、偶々中秋に至り予不幸にして病痾に冐され、呻吟數十日其間憂愁無聊に堪へざ、因て病中の苦を忍び、筆を執りて借覽の書を譯述し尙ほ病癒るの後に至りて漸く脫稿したるもの卽ち本書也、予の荒木氏に負ふ所大なるや知るべし、

本書の譯成る將さに梓に附せんとするや友人あり來訪して予か稿を見て曰く足下の交際談話法を說くや善し、然るも談話なるものは耳より耳、

口より口にてのみ傳へ得へき話術にして書上の談話法は寧ろ畠水練に類する滑稽の極ならぢやと、予之に應して曰く、子の言一見理あるか如き理なきか如き一種のパラドックスの如くして其實何等の意味なき言なり、談話の法たる眞に活術れなば、區々たる器械的書籍に就て悉く之を學ふこと能はぢとするも、日常の偏僻を矯正して完璧に近からしめば是れ豈に斯法研究の結果にあらぢや況んや本書の目的とする所必ぢし

も口舌喃々の法を教習するに止まらされば、之に就て眞個の品性、淑雅、優婉等の人の社會に立ちて必要なるものを說示するものなり、故に此點のみに於て成功するも其稗益する所尠なかるへけん、何ぞ書籍的修養の要なしとせんやと、客唯々として首肯す、因て長文を顧すぢ此の如く本書譯述の來歷を叙して序に換ゆるもの也

播州舞子公園萬龜樓上萬頃の蒼波を眺めつゝ松籟を聽きて

蘆川忠雄識

交際談話術目次

緒論

第壹章　談話の際に於ける注意……十六頁
第貳章　談話の際に於ける自信力……二十二頁
第參章　体裁、衣服、粧飾に就て……三十四頁
第四章　冷評、諷刺、戯弄に就て……三十七頁
第五章　非難と過失指摘に就て……四十六頁
第六章　愛嬌に就て……五十頁
第七章　自尊心を排す……六十二頁
第八章　鄭重と其基礎及適用……八十頁
第九章　物語、逸話、地口に就て……九十五頁
第十章　質問と其不適用、利用に就て……百〇八頁

第十一章　無遠慮、厚顔、熟視に就て……百十二頁
第十二章　議論家と自己の正當を主張する人に就て……百十八頁
第十三章　婦人の勢力と已婚婦人に就て……百二十七頁
第十四章　談話に於て忌むべき問題……百三十七頁
第十五章　奇説に就て……百四十頁
第十六章　些少の犧牲に就て……百四十六頁
第十七章　宴會の於ける談話……百五十三頁
第十八章　沈默の人と憶病及其匡正法……百六十頁
第十九章　正確の言語……百六十六頁

交際談話術

蘆川忠雄譯

緒論

身を交際社會に置くものにして、談話に卓絶せんとするを冀はざるものあらざるべし、男子と女子に論なく、何れの場合に際しても、喃々喋々巧みに談話の術の通ずるものは、思ふ儘に成功の道を開拓し、權門素封兼備の家に生れたるものに匹敵すべき利益を享受するに至る也、今夫れ玉容花顔の佳人も、斯法に

通せざれば、墻頭の花卉に均しく人の視目を惹くこと尠きに反し、尋常一樣の婦人も斯術に精通するに於ては、萬人に注目せらるべき偉大の力を與ふ、若し夫れ更に一歩を進めて言へば、富貴も地位も精錬の才藝も斯術の熟達に比しては屢々光彩を失ふに至ることあるべし、談話の德偉ならずとせんや。

夫れ安排調合其宜きに協へる社交上の快味は、常に談話の賜なるを知らざるべからず、吾人は權力を愛す、然れども權力中にて吾人の尤も快意を感ずるは、個人の勢力より來れるものに如くものなかるべし、故に古今の帝王豪傑が屢々談話に卓越し、人の性質に應じて、巧みに之を適應すべき伎倆を有して、世界の

人士を驚嘆せしめたる事實あるは、畢竟斯術の德を備へたるに因るものにて敢て怪むに須ひず、故に部下より徒らに諛辭を呈せらるゝを厭ひ、相會同して人を樂ましめ或は感動を與ふべき談話法に力を注ぐに至りし也、已に一度之を實際に應用して他人の奬勵を受け、之に加へて社交上の興味を覺ゆるに至るが故に、帝王豪傑輩が談話に就て其進歩顯著なるもの洵に故ある也

昔は英王ヂョーヂ第三世其偏僻の性あるを以て大に世人の嘲笑する所となりぬ、然れども王が博士ヂョンソンと會談したる時の如く、鄭重、智才、慧敏の三者を巧みに加味したるものは、各國の文學史上得易からざる美談にして、此の一事は同博士の

筆に因り愈々世上に明かとなりぬ

然れども吾人は巧みに談話せんが爲め、王公たるべき必要あるを見ず、否何人にても談話法に心を潜めたるものは必ずや社會より尊敬せらるゝの程度に於て熟達するに至るべし

夫れ舞蹈術を習ひたるものにして容易に舞蹈に長ぜるが如く、善く談話の活術を研究して機會の乘ずる毎に之を實施するあらば、如何なる窮屈の場合に際しても終に善く喃々喋々して多人數に圍まれつゝも、動作法あり、心志自若たるの域に進むべし

是れ斯法の修めざるべからざる所以なり

然れども書籍に就て悉く談話法を學ばんとするは誤れり、否

決して能はざるもの也、書籍は只常識ある紳士淑女をして談話に必須なる注意を與ふるに過ぎざれど、亦以て之に因て一大利益を享受するに至るや明かなり、吾人は社會に立つて大なる經驗あるのみならず、其談論の最も痛快を以て聞ゐたる某紳士を知る、此紳士の自述談を記せんに、彼が此境に進みたるものは、一に是れ談話法問題を書きたる幾多有益の書籍を渉獵玩味して獲たる賜なりといへり、思ふに良家庭の小兒と不完全なる家庭の小兒との差異は、両親の教訓如何に關するもの大なること

は何人も拒むべからざるものなり、況んや此教訓たるものは、書籍に因つて與へらるゝものなるをや、左れば讀者にして社交

上の機會に應用すべき才能なきを憂へば、自己性質上の欠點を尋ねて之を矯正するに熱心なるを要す、而して其矯正法としては、談話法の書籍を措きて他に良教師あるざるべく、斯く之を學んで始めて社會に立ちて成功を期すべき也、然れども之を矯正するには尤も熱心なるを要す、『勞れば何物をも得ず』（"Nil sine labore."）との一言は、眞に背嚢を穿つの語にあらずや、故に談話術に關する規則と類例を篤と心に留めて常に之が實習を怠らざることは談話成功の必要條件なりとす

更に尤も注意すべきは談話法を學習するに於ては一大利益ある事なり、利益とは何ぞや、曰く之を實習するは於て毫も時間を

損失せざる而已ならず、適宜に之を應用するに於ては、時間を節約するものなり、凡そ正確に談話する人は、人と對話の際、人を導て我と共に一層明瞭に談話し得べきやう力むるものなり、故に談話法に通じたる人が、他人と協議を凝す場合にありては、尤も明白に契約を取極むるを得るに至るべし、豈に獨り之に止まらんや斯術を修めたるものは、他人と談話する毎に一層其智能を發達せしむるの利益あるものにて、假例、賤き給仕人、身を太陽に曝らす水夫、眉目清秀なる婦人は言ふも更なり凡そ年の若と年長者たるを問はず、官吏と友人たるの論なく、皆談話法てふ無形の研究に因つて、胸中無限の趣味を感じて、

其心智を補充するものなり、換言すれば斯法を研究して苦痛を感ずるの時は、已に斯法を學習して實行しつゝあるもの也、否な上掲指示の數點は區々たる末枝に過ぎざるものにて、斯法を研究したるものは、社會に大勢力ある人物を驅つて、自己が思ふ儘の方向に導き得るに至れること宛然是れ小兒が二三粒の米を餌として巨象を釣ると同一の結果あるに至るを見るは、一に是れ斯法學者が其要求せる問題を選むの賜なりとす、夫れ然り然らば則ち書籍上の規則と雖も、如上叙述の點に就ては最大有益のものなれば、運用の妙は懸りて讀者の手腕に存するものといふべし、

思ふに言語なるものは、生命、心情の道德的作法的反射鏡なれば、談話を正確にせんと欲する人が、其欠點を矯正するに至れるは自然の理なりとす、若し謬妄の言語を避けんと欲せば、他人の惡事を追想し其過失を難ずるの習癖を矯正するに至るべし蓋し人の性質なるものは之を掩はんと欲して掩ふ能はざるものにて、各人皆其性質を隱掩するに巧みなりと思ふべけれど、彼の下賤の品性のみは到底掩ふ能はざれば也、此の欠點消失せば其言語は句々光彩を放つべけん、

何人にても談話法成功を目的として長き時日を費消し、終に社會に立て相應の地位を占むるに至りたる人は、假りに絶體的害

惡にあらずとも、少くも善行に背反するが如き瑕疵を有するものにあらず、思ふに善く談話することは、一面に於て他人を導て親切たらしむべき一種の美的道德に達するにありて、他面に於ては、人生、文學、美術上の善良なる趣味と連結するにあり、左れば上流社會にありては談話に卓絶すること尤も重要視せられ、其天才を備ふるものは、容易に偏見、疑團、下賤の障害的區域を遁れて、巧みに自己の技倆を發輝するものなり、故に間斷なき談話の研究と、巧妙、優雅を目的とせる交際社會の如く才能、發達顯著なるものゝ之を他に求むべからず、

茲に又研究者の細省を要する一問題あり、そは大人物なるもの

は、多くは、單獨なるよりも團體に於て、地方よりも都會に於て一層の發達をなすもの是なり、同じくアングロ、サンソン人種の血統を受けて對等の才能あるもの英米両國到る所存在し、又高等教育を受けたるものも普く存在せざるなきは何人も疑はざる所ならずや、然れども両國の所謂天才ある人が孤獨にして社會に遠からんよりは、交際場裏に出づることこそ其才能の發達顯著なるを見ずや、是れ其理如何といふに、互に思想、消息を交換すべき社會の一員となりて才腕を磨きたる也、換言すれば、談話法を研究したるに因れる也、斯くて短日月の間に我が交際せる人物の智識は言ふも更なり、其人物の如何なるものな

るや迄も互に知悉するに於て成功したる也、是を以て談話巧妙なる男女の群に入りて交誼を結ぶに於ては、旅行、冒險、大人物との私淑經驗談より、顯著なる事物に至るまで、活々然として其思想を交換し得べきものにて、這般の消息は到底器械的書籍の描寫し得る所にあらず、予嘗て熟達したる某談話家より、バイロン卿回想談を聞くを得たりしが、予は爲めに卿に就ての强き所感を腦裏に印象せる上に、卿の人格に就ても深痛なる洞觀を受けたること到底プレッシング孃が手に成れるバイロン卿經歷談と日を同ふして語るべからざるものなり、

左れば才能ある人にして談話術を研究すれば愈其才能を發揮

し、大業を成就するに至るべし、是れ相互の會見より出でたる結果にあらずして談話の活法を研究して之を利用したるに因れる而已、若し夫れ斯法の與ふる力を適切に應用するより生ぜる津々たる無限の興味に就ては茲に言明するを俟たずして明かなり、婦人にして斯術に精通せんか夜會の席上滿室をして和氣洋々たらしむるは手を反すよりも易く、之を無聊に苦む海水浴地に試みなば、連日の無聊を破りて快活の精神を起さしむるに至らん、又社會の如何を問はず遠疎なる人を接近せしめて、各自の良性質を現示せしめ、或は意氣投合せる人々を結合せしむべき効力あるものなり、之を喩ふれば温き日光の勢力が何れの

時、何れの處を問はず、普及せるが如し、是れ豈に美德ならずや、

然りと雖も人々往々談話の法を以て、一に各自の天性に出づるものとし、研究に因て成功し得べきものにあらずと信ずるものあり、然れども吾人は之を實驗の上より斷じて畢竟是れ談話法を正當に研究したるの結果なりと確信するものなり、思ふに世上を見渡せば高等の教育と寛大の心ある人にして、己れ社會に頭角を出さんと期するのみならず、他人と相提携して世に出でんとするもの尠なからざるべし、是れ寔に可なりと雖も一歩を進めて如何にせば容易に自己の思想、感情、行動を他人に傳へ

得べきやの方法を知らずんば不充分ならずや、談話法を研究したるもの悉く成功を奏して精錬の域に進むこと前掲類例の如きに至るやは、予の保證に苦む所なり、然れども予は讀者に警告すべきは、忍耐不撓の志を以て斯法を研究するあらば終には成功の堂奥に入るべきものなりと、幸ひにして讀者の本書を通讀玩味して其社交的瑕疵を發見し之を矯正するを得ば、吾人の痛快之に過ぐるものあらんや、

第壹章　談話の際に於ける注意

『最良く話す人は最良く聽く人なり』（"The best talkers are the best listeners."）とは文明各國の言語に反覆せらるゝ格言にして又『他人の言ふことに深く注意するは、交際的法典の根本なる法律なり』（"The duty of paying attention to what other people say is a fundamental law of the social code."）とは洵に注意の價値を言寫して餘蘊なき金言ならずや、

凡そ人は其機智に因り人を驚かすべく、其感情に因り人を動かすべく、能辯を以て人を衝くべし、然れども其れ按坐又手以て

得來るものにあらずして、要するに自己が屢々苦痛を嘗めたる經驗より至れるもの、經驗とは何ぞや沈默是れなり、

凡そ人才能足らず、智識、經驗備はらざるときは愈々自說を主張して稱揚、諛辭にあらざる限りは他人の言ふことに耳を傾けざるものなり、然れども此種の人に接しても忍んで其言ふ所を聽き、ウオーター、スコッ氏の例に倣ひて、該談話の問題をして、自己に有益なる方向に轉ぜしむるこそ善けれ、『己が何等かを也も學び得ざる人は尠く、又何事にても知悉するの價値あり』とは、談話法上讀者の記憶すべきもなり、

尤も談話を愛する男女に接せば十分に耳を傾けて其言ふ所を聽

くべし、是れ固より苦痛を感ずるものなるべけれども、適宜に之を行へば、自己に有益なる所感を與ふるものなり、忍耐は萬德の第一に位すれど、沈默は忍耐の最必要なる侍婢なり、左れど如何に忍耐强き人なりとて、此二者を守る必要なき談話に加はる人はあらざるべし、凡そ總ての人に善き所感を惹起さしめ得べき人は、何れも强き忍耐ある人なるは、吾人が斯法研究の結果發見したるものなりと言ふに憚らず、假令如何程光彩あり智識ある人物たりとも、忍耐、克己の力を欠かば、決して充分なる敎化ある人を感動する能はず、故に『如何にして萬般の場合に處して正當に働くべきや』を知るは、眞個の處世術の基礎

なりと知るべし、

若し夫れ人にして、少くとも、毎日一回づゝ以上の金言に反省する所あらば、我が言語足らざるの恐れなく、言多きに過ぐるの憂なきに至るべし、小兒が両親の言に、少女淑女が年長者に、青年が他人の言に對して恭順、注意なる處には、一種言ふべからざる眞個の鄭重、高尙存せり、此の事たる瑣細なるが如くして實は然らず、此中には高等なる敎育と精錬の含めるを示めすものにして、社會に立ちて成功を必すべき前光を表示するものなり、若し夫れ大人、青年が下賤の人に對してかゝる美德を表示するに於ては、其德や一層美はしく、一層氣高く見るべし、

▲談話の際に於ける注意▼

人或は謂へらく他人の談話を巧みに聞き遺るゝは、巧妙の手段なりと、然れども『處世術』の高級に達したる人にありては何人の談話にても善く聽き、又卑賤者の言に對しても、無忍耐、無關係、虚態を爲すが如きことなき而已ならず、却て之を傾聽するものなり、

對話の際は沈默以て先方の言を傾聽すべきは論なしと雖も、眼を左右に轉じて熟視するは最も禁制する所なれば、善く〳〵注意して不注意又は茫然たる體裁を避けざるべからず、然らば談話の際に於ける態度は如何にすべきやといふに、眞面目に先方（談話者）の面を見詰むるにあり、左れど先方が極めて敏捷の人

なれば、適度に取捨するこそ却て禮儀に協ふものなり、

然れども佛國某著者の言に因れば、他人が自己の行動、事業、言論に對して稱揚若くば誤辭を呈する時には、不注意又は茫然たる體あるも差支なしと論斷せり、

衆人の間に入りて他人を熟視するは、一人の場合と異り、取捨を要するものなり、吾人は男女を問はず、他人の何事か言ひつゝあるを顧みず一言も口を交へずして、一心不亂に他人を熟視して『それは自分が殘らず知つてゐる、自分を欺くことは出來ぬ』と言はん許りの調子あるものを見受けたることあり、其人必ずしも粗卒のものにあらざるべきも、慇懃の一事欠くるに於

ては他人をして此の如き感を起さしめ易きものなり、熟視は善し、而かも同時に鄭重を要するを忘るゝ勿れ、更に吾人は讀者に對して、對話上の必須要件にして忘るべからざるものあるを警告せん、曰く談話に於ては己れ談話家たるよりも傾聽者たることは、啻に鄭重の極なるのみならず、又一種の政畧なりと、見ずや能辯の女神たるポリムニアの肖像を、『巧みに沈默を用ゐれば、其言辭を最上位に置かしむる』との意を表せん爲め、彼女は常に食指を朱唇に當てゝ描かるゝにあらずや、

第二章　談話の際に於ける自信力

快活なる談話の要素は言辭の阻滯せざるにあり、之れ望まば自己の思慮に就て自信力を起さざるべからず、力を極めて饒舌者たるを避くるに力めよ、人に向て反覆の必要なき語句を繰返す勿れ、否寧ろ遠慮することこそ最も誇るものたるを知らざるべからず、

他人より聞き知りたることを漫りに口外せざるが爲め、其利益の大なるを知るもの甚だ尠きは嘆ずべきの至り也、凡そ人談話に熟する時、往々胸裏の秘密を口外して、謂へらく我一度他人に秘密にせよといへば、漏洩の憂なしと輕信し、平氣にて喃々し去るものあれど、之を聽き受けたる他人は如何でか、本人の

如く秘密を守るを望むべきや、

深く謙讓を守る人は、友人を作り得べき利益あるものにして、其價値茲に記し難きもの也、殊に婦人にありては、男子が斯の如き美德あるを信ぜば、之と善く交誼を厚くし、無限の信任を起すものなり己れ若し秘密に就て自ら一個の特質を發揮せば他人が如何でか之を崇敬せらるものあらんや、

眼界を一轉して廣く世界を見渡すに、信任を置くに足る人を得るを汲々たるものあるは何人も知れる所ならん、左れば此種の人より見れば、秘密てふ一事、如何に重大視せられつゝあるか計り難きものなり、又社會に高等の地位を占め、萬事不自由な

き人にてありても、秘密を打明けて之に信托すべき所謂『眞個の朋友』なきに苦むもの往々見る所なり、若し之に對して善く秘密を守る人との安心を得せしめんか、彼等は奮て友誼を結ぶに吝ならざるべし、一旦其信任を博したる以上は其直接と間接とを問はず、如何なる種類の事たるに論なく空談を謹むことを以て專一とする也、

此問題と連關して吾人の讀者に警告すべきものは、好奇心を避くるにあること是れなり、世上往々頗る奇妙の人ありて書簡を手にするにも、何人に宛てたるやを知らずんば之を手にし得ず又卓上にある書類を探すにも、無心にて之を摘取し難きものあ

り、凡そ他人のものを偷視するは、社會の最劣等なる人物なれば、苟くも交際社會に立ちて樞要の位地を占めんと欲するものは、斷じて斯の如き卑屈の所爲なき樣にと强て自ら爭はざるべからず、是れ一見些々たる事たるが如くにして其實最も恥づべき行爲なれば也、

茲に又讀者が常に注意を興起するの要あるものあり、そは談話術成功の秘訣は『何を言ふべきやにあらずして何を避くべきや』を知るにあり、蓋し常識あるものは、談話の材料を備て之を正確なる言語に言現はせば已に好個の談話家たるに至るべければなり、然れども好個の談話家として欠くべからざる要素は、他

人の心志を感動するの一事に存せり、故に談話するに際しては、先づ先方と自己との間に純良の同情的關係を作り置かざるべからず、斯くするに於ては、先方は我を見るに毫も無益の言を吐かず、疑團を起す言を吐かざる人なりと思ひ我が言を確信するに至るべし、然らば如何にして此の境域に達すべきか、是れ彼我両者の力に俟たざるべからざるものにして左記の極めて簡單なる規則を嚴然服膺するあらば、善く其域に達すべき也、

曰く『他人を多く喜ばしむるものは他人に最も少く反對するもの也』と、要するに此の一言以て萬言を掩ふて餘りありとす、談話中面前にある人に惡感情を抱かしめ、若くは不在の人を誹譏

▲談話の際に於ける自信力▼

するを避るにて充分なりとすべからず、何等のことにても總て空談を禁じ、他人と其私行上に容喙するを謹むは、紳士淑女の根本的品性なりと知らずや、斯く概言すと雖も、予は他人に關して、如何なる事を討究して差支なきや否やを決するは一大困難を感せざるを得ず、事柄に因り他人の事に就ても知悉せざるべからざるものありて、又其事柄も、之を知るは一時無禮に當るも他日有益適切を證明すべきものあり、極めて怜悧なる人士も自己が知悉するの要なき他人の私行に精通するを見て往々自ら喜ぶものなきにあらずと雖も、要するに己が交際する人物の運命を知悉するは、己が交際的性質を決するに於て至大の勢力ある

ものなるや疑を容れず

以上の警告は勿論、猶此他にも空談の弊害を矯正せんとする人士に向て訓戒すべきもの多々ありと雖、畢竟他人の事に容喙するてふ野卑なる性質なき人は善く之より起れる災禍を買ふの恐あらざるも、他人の家族上の事情、企圖、過失上の批評を耳にすることを避けんとせば、所謂手練の外に強固なる決心を要す、若し夫れ此の境に進みたるの人にありては空談を避くるに因り災厄に陥るの憂あるを要せず、紳士淑女にして巧みに之を成功せば、人生と社會の葛藤を和解、融和するに就て最高位を占むるの人士なり、年若き讀者に取りては何故斯くあるべきや

の理由に就ては十分に氷解せざる所あるべきも、兎も角其何故たるに論なく嚴に空談を避くるの良習慣を作らば其享受する至大の利益は、全生涯を通じて必ずや燦然光輝を發するの時來るものあるべけん、

予輩は此の問題と關係して、尤も重要なるものあるを讀者に告げざるを得ず、而かも此者たる世人は輕々視して是れ全く人の天性にありと信ずるものなり、是れ何物なるぞや、曰く術策是れなり、換言すれば適切なる時に、人力を適切に使用するてふ人生最必要のこと是れなり、茲に又之と共に述ふべきものあり人は才智を適切に驅使せば青年輩が往々陷り易き困厄を避け得

べきものなること是なり、人生の經驗足らざる人の恐るゝは蓋し才能利用てふ至德を欠くにあり、青年が此域に達すべき最も安全の方法は、人の爲すべき常道を守りて之に反する誘惑物に抵抗するにあるのみ也、故に力の及ふ限り智識を開拓して、社交、修藝の法を討究せば、必ずや信任、確信、調和を得て必要に臨みて發揮し得べき術策と實地上の才智を得るに至るべし、讀者よ之を以て有り觸れたる尋常平凡の道德說として見る勿れ以上の要件は尤も確實なる常識にして、之を適應するに於ては今日世界に尊敬されつゝある世界的優雅なる人物を作る最良の基礎たるものなればなり、

▲談話の際に於ける自信力▼

今日の趨勢に徴するに、社會は急激なる變化を受けつゝあるあり、見よ飲酒の如き、賭博の如き、極端の所爲の如き弊風は、舊派の所謂紳士時代に行はれたるも、今日に於ては最早上流社會に奬勵せられず、又彼のチエスターフイルドの殘忍的格言の如きは、僅に是れ中流社會の中流人物が討究するに過ぎざるにあらずや、青年者輩往々謬妄の見をなし謂へらく社會に光彩ある地位を占め、動作、談話の威儀雅美あるは、人類に對する愛情博愛心、力の及ぶ限りは老幼貴賤の別なく之を助くる事とは相關係する所なしと忘想するものもあり、彼輩又往々心に憶へらく、心情良心の温和は流行を趁ひ、寛大の風ある世間慣れたる社

交塲裏に立てる快活の人士と、品性上相一致すべきものにあらずと、嗚呼是れ何たる謬見なるぞや、吾人は此の謬忘の大は卽ち大なるも、其茲に出る誘惑的見解は何故なりやと云に、皆是れ全く世間に慣れざる玩是なき心より來りたるを知る也、夫れ然り故を以て時日の經過に從ひ、此の謬見は自然に其腦中より脫去すべしと雖も、苟も常に品性を優雅にして、人生を送らんと欲せば、其心を堅固、緻密にせざるべからず、之を要するに善良の人民たるものは、此等の事情に知悉あるを要す、故に此用意ある人が善良の社會に立て相當の地位を占むるものあるは、決して疑ふに足らざるべし、

▲談話の際に於ける自信力▼

讀者よ眞個に談話に卓絶せんと欲せば、是非とも此章を反覆、熟讀するの必要ありと信ず、若し夫れ本章記載の要項を盡く應用し得る人あらば、他日其心神純潔の氣滿ち、到る處識見高遠なる先輩に遇ひて、社交的奬勵を受け、以て一生を樂むを得べき也、讀者よろしく此域に至るの覺悟あらんことを要す、

第三章　体裁、衣服、粧飾に就て

談話法を論じたる佛國有名の一書を見るに、其開卷三篇は悉く是れ齒牙、口、舌に關する記事なり、之に就て見るも苟も談話法に精通せんと欲する人々に取りては、體裁の決して輕々

に附すべきものにあらずして非常に有力なることを說明して餘蘊あらずや、該佛人の指示するが如く、單に齒牙を清潔にすべきは言ふ迄もなく、身邊全部些々細小なる點に至る迄、殘る隈なく注意し、毛髮と衣服は嚴に當時流行のものを用ふべき也、其理由に至りては極めて明白にして詳論するを要せず、思ふに人の視目を惹き注意を轉せしむるものは、談話者の風采と其語る語句の如く力あるものはあらず、若し聊かにても清淨を欠ぐことあれば、多く人々に不快の感を抱かしむるものなるは萬人の首肯する所なり、されば身體の清潔と善良なる衣服は或る意味に於て、交際せる人に對する敬意なれば、之を推薦するに躊躇せ

▲體裁、衣服、粧飾に就て▼

す、然れども男子が粲然たる寶石と裝飾品、若くは人目を惹く華奢の被服物にて身邊を飾るが如きは、尤も避くべきの事に屬す、若し世間慣れたる怜悧の婦人にして、斯の如く極端の服裝を好む人を見ば、必ずや忌はしき思を起すべけん、假りに相當の敬意を起すとするも、之を着したる人物に相應する敬意を拂ふことは萬々なかるべし、斯かる場合にありては、奢移の衣服を用ひんよりは、寧ろ古服にても清潔なるものを用いる方一層安全ならずや、人眞似をして漫に派手なる被服を纏ふは、是れぞ野卑の頂上にして、所謂粧飾上の野蠻主義たるに過ぎず、今日の人が頻りに派手なる體裁をなして人に誇らんとするの傾

向は爭ふべからざるものにして、吾人の熟知せし所なりと雖、是憂るに足らず、一度此種の人に面接せば直に其薄弱の人物なるを洞觀し得べき方便あれば也、某貴婦人嘗て其對談したる青年紳士に就て意見を叩かる、彼女卒然之に答へて『請ふ妾に就て之を問ふなかれ、妾は案外にも唯恐ろしき赤き襟飾を着けたる人を見たるの外他を知らず』といひたり、知らず是れ果して何を意味するにや、

第四章　冷評、諷刺、戯弄に就て

如何なることありとも避け得らるゝ限りは、他人の感情を害す

▲冷評、諷刺、戯弄に就て▼

るが如き言を用ゐるなかれ、

今日に於て頓智的諷刺、敏速の應答の普く奬勵せらるは眞に痛嘆に堪へざるものなり　蓋し人々皆所謂へらく若し世に諷刺なるものなくんば、交際社會は活氣を欠ぎ沈滯なるべしと、又總ての頓智なるものは、最も機敏鋭利なるを要すとは、屢々世人の信ずる所にして此輩が好んで之に耽るものあるは怪むに足らず、彼等所謂らく簡單の諷刺と速席機敏の反答は稱賛を博するの價値ありと、思ふに過去の時代を回顧すれば、其例あるものにて、今日已に其名聲堙滅すべき文學者、政治家、技術家も、頓才機智を用ひたるに因り其逸話殘存して猶時人の頭裏に新な

るものあり、彼等又曰く恐るべき過失も頓智を以て矯正せられ、社會に害毒視せられたる人も、鋭利なる諷刺の力屢々善く之を抑制したるものありと、

其言ふ所理なきにあらずと雖も、靜かに之を考究するに、頓智的諷刺の謬安たる、其利益と比較して到底得失相償ふものにあらざるに、之を知るものなきは眞に不幸の事にあらずや、試みに思へ、總ての爭論、惡感情の根原は皆之より胚胎するものにあらずや、

假に一度頓智を以て、無禮の行爲を鎭撫すべきも、之が爲めに百千の輕蔑心と復讎を起さしむべし、今夫れ鋭利なる反答を以て

▲冷評、諷刺、戲弄に就て▼

所謂『鞭打』をなせる實例に徴するに、若し反答者の機智善く頓智に優る他の手段を取りて、自己の品位を毀損せざる範圍に於て『鞭打』に代へ得べきものあるを發見するなるべし、凡そ鋭利なる反答を以て世上名高き人の、極端なる害毒物に終らざるもの の尠きは、尤も注意を要する事項にあらずや一彈を放つて善き 穢物を得たるも、是れぞ全世界に對する『害毒的機械』を設置したるに過ぎざるぞ悲しけれ、

卑賤なる言語の使用を避くれば、之と同意義にて、尤も正確機慧なる言語の代用すべきものあるを見るに至るべしとは、常に人の言ふ所にして、又背槃を穿つの言也、冷評、諷刺、頓智を

避くるに於ても亦然り、之に因て、我が意志發表を減少せざるのみならず、却て其人の實力、眞價を發揮するものなるや疑なきものとす、

假りに百歩を讓りて他人の無禮に對し反答をなす事、絶對的必要の場合あるも、又卽席に思附きたる鋭利の返答あるも、善く頓智の使用を避け得べきもの也、又他人に苦痛を感せしむる事は忍び得べきことにあらねば、之に代ゆべき他人を詰責する言辭あるを記憶せざるべからず、斯く他人に向て我が優雅寛宏の度量を示すは他人より深き崇貴の念を惹起さしめ、最後の勝利を期すべきものなり、

▲冷評、諷刺、戯弄に就て▼

諷刺的反答に名ある人は、果して其心底より眞個の意味に於ての紳士、淑女なるや甚だ疑はしき事なり、見ずや專門頓智家が直に其得意の武器を攫んで人に向ふこと、宛然喧嘩に耽ける馬丁が、厩舎より直に小刀を取り來ると同一のものにて甚だ見苦きものあるを、教育あり素行正しく、一見紳士らしく見ゆるの人も、敵に遇ふときは、突然其器具を握りて敵を撲つも、喧嘩終りて、後に之を地に投じて之を用ひたるを悔ゆるものなり、聞く下等社會にありては、機敏、峻酷の言を用ゆること愈々多しと是れ眞個に味ふべきことならずや、蓋し下級野卑の階級に近けば、談話中冷評、忌まはしき返報、斷間なき喧嘩は、常に見

聞する所なるを以てなり、青年諸氏よ、若し談話法に精通して奇効を奏せんと欲せば、此問題に鋭意して自ら深省猛察することを要す、假令、前代の下級社會にありて、此種の頓智善く人の喝采を博したるものあるも、今日の教育ある社會に於ては俄然根據を失ひつゝあるにあらずや、

予は談話中極めて輕妙流暢の調子に倣はんとする人物に出遇ふこと屢々あり、斯くいふては物足らぬ心地すれど、予は人の面前と否を問はず、『卑むべき冷評、忌はしき誹譏』に耽りて、得々然として『鍛錬ある冷評、鋭利なる諷刺なり』と自信せる輕薄の男女を指摘する也、年齢漸く長ずるも教育不完全なるハ

▲冷評、諷刺、戯弄に就て▼

イカラ流の輩は、好んで斯かる下賤の作法に耽りて、他人より才士なり、世間慣れたる人なりと言はれんと思ふ、此種の人物は、漫に浪費を事とし、又美服を纏はゝ自己智能の欠點を隱匿すべしと妄信せるものにして是れ卑賤の社會には屢々見受くる所なり、此輩思へらく良風美俗なるものは、衣服と同じく外部に着用し得るものと、嗚呼世上何物か此の弊風に倣ふが如く容易なるものあらんや、此の事たる我が不完全の教育と品性の野卑を掩ふはんとする尤も賤むべき行爲なりとす、

談話中は、常に無遠慮の振舞なき樣心懸けざるべからず、他人を戲弄するが如きは、人々見て樂みとなす所にして、頑是なき

少年を捉へて戲弄の犧牲となすは、往々見受くる事なれども、之が爲め、折角發達すべき少年の良性質を害し、獰惡の性質を作らしむるものなり、豈に獨り是に止まらんや、戲弄の結果として他人より憤怒を買ひ輕蔑を求むるの基をなすは、世間普通の事なりとす、凡そ直接間接を問にず戲弄を喜ぶ人は、善良の性質を備るにせよ、眞個尊敬を受くるに値すべき人物にあらざるのみならず、他人を輕蔑し他人の感情と尊敬を寄せざる人物なり、斯く他人を翻弄して自ら抑制するを知らざる戲弄家は、才能不完全、不規則の徒なれば、之を遠けて交はらざるに如かず、頗智の才に富みたる人も、往々鍛錬なる作法に通ずることなきに

▲冷評、諷刺、戲弄に就て▼

しもあらざれど、要するに他人を攻撃して自ら快を呼べる厭悪すべき性質のものなれば、眞に危險なる伴侶にして十分警戒を要する也

第五章　非難と過失指摘に就て

談話に熱達せんと欲するものは他人を非難することに就て深く自ら警戒する所なかるべからず、人に因りては他人を非難し或は咎立て、不平、不賛成の言を交もるにあらざれば快談をなし得ざるものあり、此輩に取りては他人の過失は自己の呼吸の如くに思ふ也、是を以て彼等は常に人を卑賤視し、其談話のみに

て之を判斷すれば、其生涯中未だ嘗て端正崇高の人物に接したる事なきが如く思はしむ

交際場裏に於ける談話の大半は他人の過失を指摘し、又は不在の人に對し、不名譽なる批評を加ふるにあるを見るは如何にも好ましからぬ事共ならずや、吾人は品性の高尚の人が空談の下賤たるを知りて靜かに之を避け、話頭を一轉するを見受ることあり、讀者よ、予は讀者が時と場合と誘惑の如何を論せず、此種の人物を理想として之に慕傚せんことを勸むるに躊躇せざるものなり、又讀者は毎朝起き出づる毎に不必要なる言語を決して口にせずとの決心を立てられよ、斯く自ら定めて永く其決

▲非難と過失指摘に就て▼

心の指示する所に從はゞ、此の惡弊を救治し得るに至れるのみならず、自ら紳士たるの域に進みたるものにて、之を何れの國の社會に置くも眞に比肩なき紳士たるに恥ぢざる也、世間如何程口善惡なき人多ければとて、他人に向て惡聲を放たざるの人を見ば、誰か之を高尚の人物として畏敬せざるものあらんや、此の如き寛大の量ある人は世上容易に得易からぬものにて眞に尊敬を表すべき優等の人物也、故に其言語が社會到る所に最も注意せらるゝ所以のものは畢竟、其言々、句々眞實にして、又其言ふ所は、他の惡意、殘忍の行爲に因て汚染すべからざるに出づるのみ、交際社會に於て優雅、修養兼備の婦人は、他人の過失

を見るも、之を寛大視して其品位を高め、之に因て談話法の手腕を研磨すること頗る多しといふにあらずや、

直接間接を問はず、他人に對して忌はしき言辭を吐かずとの決心を立つるは一に青年の力にあり、青年たるもの將來の大成を畫し、幸運に際會せんとせば、尚更謹んで之を戒むるの要あり、何んぞ況んや非難、不平の言を爲さずとの純正の精神は、青年に稱益を與ふるの至大なるものあるをや、

世人は不平、非難の弊害あるを知りて、之を戒むるに關せず、躬行實踐して此の習弊を防がんとするものなきは甚だ怪むべき事なり、斯く言ば吾人に對して强き反對說をなすものあるやも

知るべからざれども、事實の之を證明するものあるを見れば必ずや喫驚一番其論鋒を轉ずるならん、讀者若し、此の矯正法に就て充實せざるを憂へなば、回想に便せん爲め、一冊の備忘錄を取り出して、他人の面前に語るべからざる評語、一身上に就き吐露したる言句をば、一日少くも三回記入せよ、斯くて之を取り出して反覆熟讀せば必ずや自己の弊風を矯正して完璧に近くを期すべきなり、

第六章　愛嬌に就て

愛嬌のことたる他人に心地善き感を起さしむるものなり、總て

他人を喜ばしむべき方法は何れも皆愛嬌の性質を帶ぶるものなれば、全然之を非難することこそ沒理想のことに屬す、詳かに之を謂へば、愛嬌とは、他人の心中に於ける秀德、美性に對し、己れが心底より强き感を起せる善美の尊敬なり、左れば寛大仁慈の行爲も、全然愛嬌を欠くあらば、其眞價を減少するや大なり、

世故に長けず、談話に熟錬せざる人は、愛嬌に對し、嫌惡の言辭を吐き、惡感情を抱くものにして、他人の稱賛的言語の果して眞意より出でたるや否やを疑ふは、屢々見る所なり、故に其受けたる愛嬌に對して、適切の言語、品位ある應答をなすに苦て、

▲愛嬌に就て▼

之を喜ばざるのみならず、却て益々苦惱せるを見べし、是れ主として心中他人に戯弄せられずや、巧みに飜弄せられはせずやとの不安心より起るものなれども、是れは大なる謬想の源なり、假りに此の如き不安心と恐懼心起ることあるも、心性確然、品位教育ある人は、之を以て毫も自ら苦むことあらざるなり、固より愛嬌に因りては、直に他人の反抗を惹起すが如き事なきにあらず、愛嬌にして下賤なるものあり、醜劣なるものあり、平凡なるものあり、陳腐に屬するものあり、然れども此は談話者の性質如何に因るものにて、決して一概に論ずべからざるものなれば、之を以て自ら苦惱煩悶するものあれば、其罪彼にあ

らずして我にありと心得べし、左れど如何なる場合を問はず、純然たる諷刺、或は假託の輕蔑にあらざる限りは、決して餘り嚴格に之を解釋すべからず、況んや彼の尋常一樣の諛辭たりとても、之を語る人の心にては、他人に喜ばしき感を起さしめんとに過ぎざれば、之を誹譏、諷刺、空談に比すれば一層優るものあるに於てをや、

吾人が單に技術として談話に卓絶せんとするは、決して世人より好評を受けんを目的とするにあらず、若し斯くあらんには、談話の流暢自在なるもの消失すべし、故に年若き婦人に對して、愛嬌を振蒔きたりとて、必ずしも其人稱揚法言語に巧みなりと

▲愛嬌に就て▼

てふ世評を受けんがためにあらざるは、改めて論ずる迄もなき事なり、凡そ其人相當に尊崇畏敬するは、實に一種の愛嬌なれば、之を充分發達せしむるの必要あるなり、さりとて予は愛嬌を研究せよとは言はず、そは研究して得たる愛嬌は、畢竟何等の効益を奏せざるものなればなり

清快の言と機慧の語とに論なく、凡そ人の衷心より出でたる畏敬は、何人も異議なきものにて又眞正の畏敬とは、必ずしも言語を以つて表出するのみに限らず、擧動、視勢（他人を見詰むるが如きは非也）も亦其中に含むものなり、此等は何れも皆談話法の範圍に屬するは機敏なる讀者の早くも之を察知するな

るべし、吾人にして充分に他人の性質、傾向、藝術、交際に注意せば、誠實の心善く人を喜ばしむるに足る愛嬌自然に湧出し之を用ゐべき千百の好機會は、迎へずして吾人の前に横はるものあるを見るべし、

凡そ愛嬌中にて尤も心地善きものは、殊更ら之を力むる色を現はさずして心中眞面目と熱心の充實するにあり、婦人に對して此方法を取らば　其喜ぶこと一層甚しきを見ん、蓋し先方は愛嬌の心地善き感を受け、又其眞實の心深く婦人の心底を穿つものあれば也、

知らずや美人は他人の瞥見、擧動よりして其の美貌の崇敬され

▲愛嬌に就て▼

たるものあるをを察知するなり（譯者曰く歐米特に米國にありては婦人の崇敬せらるゝこと非常なれば、婦人の一言一行は其勢力至大なり況んや美婦人に於てをや）

此點我國と事情を異にすれば或は奇異に感ずるものなきやを保せざれば從て之を實際に應用する機會尠なけれども暫く原文の儘を譯出せり（但我國のハイカラ黨に取りては尤も熟讀すべき金科玉條と知るべし）教育充備せる婦人に對して其才智、修藝、精神、深切、趣味、習癖、希望、交際に就て、充分の愛嬌を呈せば其喜びや一層深くあるべし、況んや美人の容貌以外の點に於て、世人の知らざる美性に對し、深き尊崇を受けたるを

知らば、心中必ず其人に向ひ感謝の意一層強く起すなるべし、凡そ必要の言語は幾度之を反覆するも差支なきが如く、誠實より出で、此の如き愛嬌の言語を發するは洵に容易の業たるべし、

夫れ人にして他人の說を聞て多少の興味を感ぜざる人はあるまじく、概して言へば男子は、其不在中婦人に稱揚せられたるを知りて喜ぶのみならず、他の婦人に體裁善く話さるゝを聞くも亦喜ばしく感ずるは人情の常なり、今才能敎育共に充實する婦人は、容貌醜惡見べき所なきが如きものにあらず、凡そ人類は其男女に論なく、外貌の美なしとするも他人の人格を尊敬すべき言語に接して信任を措くものなり、彼の同情心、快活の意

▲愛嬌に就て▼

氣を備へ、容姿の美なる婦人にありては、愛嬌崇敬の言を爲すも顧みざるものあるば必ず其例乏しからざれど、一旦誠實親摯にして溢る如き愛嬌に接せんか、驚喜の餘り心氣鼓動して堪へ難きに至るは敢て怪むに足らず、殊に其姉妹が他人より崇敬を受けたる時の如きは、茲に至り易きもの也、世評極めて高き婦人も、如何なる特質ありて斯く崇敬せらるべきやと自ら反省するも、其理由を知るに苦むの例は往々見受くることあり、予は茲に某美術家がルーヴルにある肖像が特殊の容貌なりと非常に崇敬を起したる一例を引抄せんと欲す、而かも此肖像たる、世上より決して其美を認められざる、年若き婦女の眞相に寸分も違はざるものなるを偶然にも發見せり、此の如き關係より容貌見るなき婦人も吾人に美的感を起さしむ、此關係を知らざる無智無學の徒は、之を一見して酷烈の批評を下すべきも、一度び經驗智識を備へたる人の之を瞥見するあらば其價値を認め一層之を喜ぶものなるや必せり、夫れ一個の彫像尚且つ然り、然らば吾人にして趣味善く備り疚ましからざる信實の心を以て、愛嬌ある言を呈せんとせば、之が機會の缺如することあるを憂ふるに及ばざべし

夫れ愛嬌なるものは一種の好諧謔なるが故に、餘り嚴正に之を解すべからず只鄭重を表する言語なりと思ひ之を歡諾するとこ

▲愛嬌に就て▼

そよけれ

愛嬌を表はすときは自己の作法、體裁、言語、調子迄も注意して、之が成功の秘訣は談話の成功と同一たることを忘るなかれ

人々其話さんとするに際し、特に笑顔を作り、或は前提の言をなし、或は忌はしき顔色を現はし以て非常の事の起るを待つものに類せしむ、或は愛嬌の結果如何を見んとする體にて、好ましからぬ言を吐かんとするの體を作るものあり、此等は下賤なり、斷じて斥くべし

然らば如何にすれば可なるべきや、曰く唯一の規則あるのみ、自然に愛嬌の現はるゝを期するにあり、

常に世人の口にせる世辭、愛嬌にして人意を快にするものあらば充分注意を要す、故に之を參酌して、愛嬌の道を悟らば、交際社會の技能に精通し、自由に愛嬌の現はるゝに至ること極めて容易の業に屬す、蓋し人は他人に對するが如く、亦我に對し愛嬌を以て喜ばしむるものなれば讀者は之を悟了する機會に際會すること尠少にあらざるべし、然れども愛嬌と世辭とに論なく自然に出でず、眞摯誠實の衷心より露出せざらんには人以て阿諛便佞の言となし、却て冷評するなるべし、交際社會に立つ談話家たるもの熟慮細省なからずして可ならんや、

▲自尊心を排す▼

第七章　自尊心を排す

談話中は出來得る限り、自己の事に説及するなかれ、自己の長所を誇示すとの疑團を避くるに力めよ、此の事たる尤も重要の事なれば之に反する習癖は何處迄も打破するに勉めざるべからず、不幸一旦此習癖に感染せば之を隱掩せんとするも能はざるものなり

自尊心は德行の毒藥也、害物也、人は如何程才能、學識、勇氣美貌なるも自尊心は悉く之を打消して殘す所なからしむ、故に三尺の稚兒と雖も容易に其笑ふべき虛榮心なるを知る

自尊心、自負心の如く交際社會に害あるものはあらざれば、精々細々注意に注意を加へて其何に關するとを問はず之を遠けざるべからず、佛國の某記者曰く『抑制的虛榮』及び各種の虛榮は人の作法に因りて探知するを知べしと、要するに自尊心は一種の習癖に過ぎず、夫れ己に習癖たる以上は之を救治すべきものにて而かも隱蔽すべからず、自尊心を抑制するとは、決して自信力を打破すとの謂ひにあらずして、實は自己を他人と見做して、社會に進み、我が言ふ所のみを主張し、又我爲したること を發表する所謂愚にも附かぬ習慣を打破するの謂ひなり、蓋し此習癖たる『小談話』若くは他人の家族、婚姻、約束、注意、

▲自尊心を排す▼

好運及び他人に關して他人の言說したるものに就て空談するの際に尤も發達し易きものなり

意志薄弱 教育足らざる男女は、他人の事を熟知するは、社會の事情に通じたるものと妄信すれども、實は此輩こそ一種異風の自尊家と認めて差支へなし、都府と村落を問はず、意志薄弱の人程所謂『流行』の中心物とならざるものもあらず、斯かるものに對し人或は賞揚し或は笑顏を示すものあれども、其心中には此の人物を賤めり、無益なる他人の些細の事に多く心を注ぐは淺弱なる虛榮心の罪を增す所以也、他人の言ひたることを顧みるに忙はしき輩は自己も亦必ず此輩の地位に代はる人と

なるに至らん、今日の空談社會に於て才人と眞摯正直の人物に乏しきは畢竟他人の自尊心を顧省するに忙はしく、爲めに我が美點を撲滅するに因ものなれば斷じて己の習癖を語るなかれ、人或は自ら勇躍して、倨傲心を得るに汲々たるものあれども、斯の如く大なる謬妄はあらじ、是れ其自負心の爲め其人の尊ぶべき德望を害すればなり、苟くも虛榮心を避けんとする人は、絕體的に之が使用を禁ぜざるべからず、一言以て之を掩へば、凡そ何事に論なく對話者をして己が語りたる結果如何を見つゝありとの疑念を挾ましめざる樣勉むるこそ最も緊要の點なり世には自己の虛榮心を遠げて己の行爲、事業を語れる人あるに

▲自尊心を排す▼ 沢者ハ直沢ノミデ言ッテ ナンカ ガ ウ ナ ニ ヤ ナ ー カ

反し區々たる日時を話すにも直に自負心を現はす抱腹絶倒の輩あり、是れ豈に見るに堪へざる滑稽的擧動ならずや、

薄志弱行の徒に遠かるも亦尤も重大の注意也。己れ若し虚榮心に陷るを避けんとせば、可成的此輩と空談するを避けよ、無智は自ら人格の中に潜伏するものなれば也、尤も興味を感ずべき大疑問、書籍、美術、娯樂、崇美の問題に關して毫も心を注がざる輩は、別に談話の材料とてなければ得々然として自己又は他人身上のことを語れるものなるは普通なり、若し事情の止むを得ざるものありて誹謗者、空談者、自尊家と交はるの必要あらば、彼等の感情を害せず、好談柄を遠けて、靜かに之と交はるべし、斯く斷乎として二三週間もかゝる問題に遠からんか此訓錬の利益大なるものあるを覺るに至るべし、己れ斯く迄も確然として其欠點を矯正するを力むるに之を嘲笑するものあらば、是れぞ、取るに足らぬ愚物にして、道德上の害惡人たるを免れず、

以上の欠點と相關係して尚一の言ふべきものあり、そは空談、非難の如く甚き害惡を起すものあらざるを以て、之を根治せんと欲するも、容易に効果の認め難きものあるに因れば也、然れども請ふ爲めに失望するを止めよ、若し交際上の經驗乏く敎育不完全の社會に立入りて見んには、必ずや自ら德行の人なりと

▲自尊心を排す▼

標榜せる人物に遭遇せるを見て、折角空談と虚榮心を抑制せんとする勇氣を減少するに至ることあるべけんも尚且つ進んで屈するなかれ、吾人の胸中に畫く所のもの悉く之を現實に表示すること能はざるは歴史の證明する所なり、若し吾人の思ふが儘に直に現實に現はれ得べきものとせば、吾人は議論、本智を使用すべき機會とてはあらざるにあらずや、請ふ心を安んじて可也、談話中己の心に描きたる光景、自己の知れる大人物、若くは旅行、成功等に就て自ら其他に誇示すべしと思ふものを屢々引證するなかれ若し出來得べくんば　自己の長所に關する思想をいふなかれ、婦人の如きは特に此虚榮心を探知し得べきものなれば也、去りとて或人の如く殊更躊躇して自己の經驗談、成功談を避くるが如き愚をなすなかれ、

或一種の人は此の如き虚飾を極端に實施して、自己の旅行談さへ避けんとするものあり、これぞ一種の體裁善き虚榮といふものなれ、夫れ心性謹直の人は、旅行家、事業家の經驗に就て珍談を聞んとを期待する者なれば斯の如き場合に殊更遠慮會釋するは愚なり、進んで所見を語るべし、經驗上の説明を必要とせば適宜中庸に協ふたる程度にて憶面なく之を語るべし、此の如き爽快の談柄に供すべき機會決して乏きに非ざるべければ、巧みに之を利用することこそ、怜悧の人ならずや

▲自尊心を排す▼

人に向ひ、我身の富有なること、富豪と親しきこと等を語ること なかれ、此種の忌はしき虚榮は米國にありては普通のことにて却て之を語るこそ其人の社會的地位、教育の有無を計量する貴重の尺度とすれども、斯の如き談話こそ忌はしき事なるに、商業社會の人は、此の誘惑に陷るもの頗る多きは誠に痛嘆に堪へざらんや、此種の餘弊と見るべきは事實上重大の場合あるも、殊更之を忘却したる體を裝ひ、又高價なる物品をも輕々視するの虚榮心に達するあり、甚きは我が富有の身なるを語らざれば他の富豪に説き及ばす、或は『貧者』として嘲笑するにあらざれば、他の畏敬せる人物の批評をなし能はざる習癖を釀すも

のなり、己若し相當の生涯を送れるものにして此の如き言語を洩らさば、先方を諷刺の意志なく、又其反對を受けざるにせよ賤むべきの行爲なるは明かなるもの也、思ふに此の虚榮心は、他人をして常に奢侈に長ぜる人と思はれんを望むものにて其拙なる陋なる人をして嘔吐を催さしむ、此輩の常に口にする所を聽くに『予は寶玉、客室、高貴なる獸皮、乘馬、絨段を有す』曰く『予は某々富豪を知れり云々』と、尤も滑稽なるは其實己が近傍には富有家なきに『懇親を結びつゝあり』抔誇顔に説き立つるこそ實に聞くに堪ざる所行なれ又一種の人は談俸給に及べば、必ず『一萬圓』とか何萬圓とか、口に任せて豪言放談するもの

▲自尊心を排す▼

あり、或は婦人にして、『予が友人の指輪は三萬弗の價あり』抔絶間もなく喜んで語るものあり、或は『他人の物品は代價何程なり』云々と語りて、其物を見下げて、眞面に尤らしく吹き立てるものあり是れ皆一種の虚榮に過ぎず

以上指摘したるもの〻如きは洵に其顯著なる例なれども、要するに己の强き興味を有することをば、談話の席上に反覆するなかれ、假りに自己が政治、宗教若くは他の問題に就て特殊の技能ありとするも、相手の人は自己以外の人より之を聽くの機會あるべく、之を談話の席上にて主張するに及ばざるべし、假りに我が體格の强健、容貌の美麗、技藝の通達見るべきものあり

とするも、直接間接に自己の長所を取りて唯一の研究材料となすが如きことを爲すなかれ、

自己の私事に就て、殊更ら人に信を措かしめんが爲め自故又は友人に關する秘密を打明くるも亦一種の虚榮心に過ぎざれば謹んで之を避けざるべからず、薄志弱行の徒、之を以て往々他人の信任を得るの方便となすと雖も、確信ある人にありては、一旦實に其虚榮心たるに過ぎざるを觀破すべし、

凡そ談話中自己の失敗、悲哀、不幸を他人に標榜して談話の材料となすが如きは愚の極、耄の極とも稱すべきものなれば、切に此の悪弊に染まるなかれ、假りに之を見て我に同情を表する

▲自尊心を排す▼

が如くに見ゆるも、多くは先方の心中極めて冷淡虚心にて迎へられ毫も同情を表するものにあらず、之を語るは是れ亦一種の虚榮に過ぎざれども、寧ろ憐むべき虚榮心にて我が運命の神に見離されたることを自白するものにあらずや、況んや自己私行上の過失、悪習等を告白するに至りては、其愚昧の極言語に絶す、此種の人物は往々學校に於ける未來の小説家中に見受くる所とす、佛國の某著者頗る敏慧の言となして曰く『自己の事に就て常に語るを避けよ、そは事稱揚に關すれば他人は見て虚僞なりとし、自ら我を評すれば一言一句取りて以て信實の事となす』と旨ある哉斯言や、之を要するに如何なる方法、事情に論

なく避け得らるゝ限りは、自己の長所、短所を捉へて談話の料材となさゞること最も安心なれ、

強く力を入るゝ首肯的言辭を吐くは無益の業なりとす、假例『予は知る』『慥かに然り』『然り』『予は偶然に悉く之を知るの機を知たり』といふが如きは、甚だ自惚の強きものなるのみならず之が爲め他人より冷評を受くる基にして又之が爲め往々他人の感情を害することあるは屢々見受くる所なり、若し之に代ゆるに『予は思ふ』『予は信ず』『請ふ宥恕あれ、されど予は之を耳にしたり』『予には然か思ふ』等の如く謙讓の言を以てせば如何程大人しく響くぞや、單に此の言辭さへ述ぶれば以て足れるものに

▲自尊心を排す▼

あらず、須らく謹んで其音聲に餘り力を入れて語らざる樣にすべし『御免を蒙りて』といへば一層丁寧の言ひ方なり、最も無益尤も賤むべきは、「ム、」『プゥー』『君は澤山知つて居る！』『つまらない！』『下らない！』といふ間き間投詞を發するにあり、

此等は論ずる迄もなく、其他之に類似する言辭は、如何なる場合、事情ありとても斷じて口外するなかれ、是皆下賤の極にして、而かも人の首肯的言辭に對して反對の意を表するに當るもの也、

困難せる人を助けんとするにあらずして、我が卓見を示さん爲め他人に忠告を與ふるは虛榮の極にして、恥づべきの至りといふべく、其不法なること何人も首肯せざるを得ざるべし、

此種の言辭は實際上無意味にして別に新思想を與へざる散漫の語句に存す、『勉勵なれ』『儉約なれ』『勇進せられよ』等の言は幾百回反覆するも惡からざれど、若し其忠告たる、口先き許りに止まり毫も事實に現はれずんば他人の感情を害するの結果に終る而已、單に自己の談話と其結果を聞かんが爲めに語るが如きことをなすなかれ談話者一人以上ある場合には單に自れが所見を他人に發表せんが爲めと思はれて、誘惑極めて大なれば、寧ろ己れを警戒する覺悟にて注意することこそ穩かならずや

▲自尊心を排す▼

人と語りて悪感情を起さしめざるを力むべし、然れども虚榮心を表白することは固より忌むべきことなり

常に交際的辯士たるを避けよ、所謂『座敷講釋士』は虚榮の常式たるものにて、特に素性賤しき人の、俄かに智力の發達ありて、多少世に知らるゝに至りたる人は、此種の風あるものなり

彼の小辯士、小宗教家、小詩人、小政治家の徒、此の弱點に沈溺して意氣揚々、好んで自説を主張し、職業上の要件を私交の席に持出すものにて其愚の極なるを知らざるぞ憐むべきの至りなり、

談話中他人を指導することを試むる勿れ、又己れが話さんとす

るに先ち四圍を熟視して人に沈默を強ゆるなかれ、己れの言ふ所善ならば世界の人誰か之を知らざるべき、流行の寵兒たらんとし、或は己れ一人にて談話を持ち切らんとするなかれ、予は嘗て談話に名高き某紳士が、凡そ一時間も衆人の視目を己に集めて、自ら憤怒せる如き顏色を現はしたるを知れり、是れ他人が彼と同樣の談話を試みんとするを見て之を制止せんとするものにて其虚榮の極笑ふべきは論なし、記憶せよ、謙讓を學びたりとて自ら成功の道を妨凝する事にあらざるを、否謙讓の德に進まんか、却て他人の確信と信任を受くるに至るべし、『不遜とは多くは是れ躊躇、怯懦の外被に過ぎざるものなり』、世に處するの人

戒心一番ありて可也

第八章　鄭重と其基礎及び適用

眞個鄭重の基礎とは親切にありと知らずや、總ての鄭重は事實に現はれ衷心より出づるものならざるべからず、口舌上の鄭重は、寔に輕佻浮薄の極也、他人に對する自己の偏僻を除去するに勉めよ、期せずして鄭重の域に進まん、他人を嫌忌するは多くは確乎たる根底あるものにあらずして、其大半は空談、想像氣質等より起るもの、靜かに之を思へば何れも容易に宥恕し得べき事にして、要するに區々たる細事に始まるは今更細說する

の必要を見ず、

眞個の不評判、罪惡の人にあらざる限りは、何人とも常に交誼を厚ふするは、吾人の利益にあらずや、若し斯く爲さんと欲せば、男女を問はず、其人の氣質を怠らず注視し、些少なりとも之を滿足せしむるの機會を逸することなかれ、懇切を以て鄭重の要素なりとせば、他人に勉むることも是亦必要不可欠の條件にあらずや、己の談話する人を快からしめ、或は之に盡すべきことあらば、何事に限らず自ら力を注ぐことを忘るべからず、又些細の事なりとも友誼を共にすべき機會を捕ふるに敏なる所あれ、若し夫れ『鄭重を解剖すれば、其中には他人を快くすべ

き意思、他人の要求、希望に注意すると共に文雅、優美、安易品位ある作法を含む』

"Doli'ones includes polih, elegance, case and gracefulness of manner, united with a desire to please others, and a careful attention to theis wants and wishes."

高尚の品位を作らんとする第一歩は、如何なる社會に立ちても人の信任を厚ふし、心を平安の地に置くにあり、言ふ所正しく智識信を措くに足り、偏僻の風采なく、目立つ事を避けなば、人何くに行くとして信任を得ざるの理あらんや、左れば下品の思想を以て自ら惑ふなかれ『我は我たり』てふ獨立獨歩の見地

を取つて動くべし、凡そ社會の事情に慣れざるは、自家の憶病に出るものなれば、若し如上の決心を長く飜さゞらんには、我行爲の笑ふべきを悟るの日來るべし夫れ平安、快活の心と平易の言行善く事に處するに於ては、品位の高尚は期せずして來る可き也、

若し夫れ交際場裏に於て、故なく屢々己を赤面、苦惱せしむる徒あらば、憶惻なく直に言ふべきを言ひ爲すべきことを爲して之を排除せよ、胸中逡巡不決の念あるなかれ、又未知の人には紹介を求め、他に善き考案ある迄は天氣、散歩、居室、其他些少の事に就て語るべし、是れぞ鄭重の第一着にして、又其義

務なりとす、固より此種の業は交際社會に於て、賓客の退屈氣鬱を好まざる主人役のなすべき所なれども、己も亦時と場所を選ばず他人に向ひ斯くなすことこそ眞個鄭重の本義に協ふものなれ、

年老ひ身賤き婦人の爲めに扇子を取るの勞をなすを以て無關係の事を思ふなかれ、若し我が心快活ならば（斯の如きことに就き屢々思ひ及ぶならば必ず自ら斯くなすべきの至當なるを知るべし）年長者を滿足せしむべき快活の容貌と熱心の必要自ら心に浮び出で之が爲めに勞を爲すことを辭せざるべし、若し一歩を進めて舞踏室に於ける美人に對し同樣の鄭重をなすべき

機會あらば、年長者に對するよりも一層丁寧になすべし

男女両性の青年よ交際場裏に於ける注意、挨拶、丁寧、品位は總て是れ家庭に於て妹姉、兄弟、両親其他に對すると同一のものたるを記憶せよ、慇懃は慈善と同く先づ一家より始まるものにあらずや、（"Conetsy, like charity, begins at home.）されば男兒と女兒には、召使の手より物を受取る場合にも必ず感謝の意を表す事を能く〳〵敎へ置くべし、他人より用事を辨じ呉れたるときは同樣感謝の意を表はすこと勿論なり、

交際場裏に立つ紳士淑女にして、鄭重の作法に通ぜるに從ひ愈〳〵其召使及び下級の人に對して丁寧に談笑するものなり、知ら

ずや佛國の紳士、淑女は、其隨從者に對する挨拶は、宛然其知己に對するが如きものあるを、然るに上流社會の英國人は、奴僕にして自己と宗教を共にし、同一の教會に行くものも輕く々に看過して、宛然器械物視す輓近此の弊風稍々矯正せられたりと雖も、尚瀰及せるは寔に千歳の痛憾に堪へず、

新聞紙上にて散見したる事にて、友人を娛ましむるに足るべき事あらば、出來得る丈け迅速に之を友人に示すことを怠るなかれ、記憶せよ、又少年、少女に對し、聊かなりとも贈物をなすことは、先方にて之を歡受するものなり、奇石、貝殼、圖畫其他何にても好恰の贈物たるに足らん、固より人に因ては斯かる

贈物に對し斷然返戻するものあるべしと雖も、其好意は冷淡ながら感謝せられ、其慇懃は、先方に於て受取りたるものと思へば、夫れにて濟むべし敢て彼れ下賤の徒に傚ひ、之が爲め不滿不平の聲を高むるなく、自己の衷心と作法を實地に應用したることを記憶せば足り、何人に對しても注意を怠るなかれ、然らば自己の心中にて報酬を受けたるものあるを發見せん、亞剌比亞人の格言に言はずや『善を爲して海に投げよ、魚若し見ざれば神必ず之を見ん』と、至言といふべし、虛飾の希望なき眞個の鄭重を實際に適用するに於ては、假りに身邊の體裁之に協はずとも、品位ある作法に通ずるに難からざるべし、先づ他人の爲し

たる感謝、挨拶、場所を讓り、椅子の取扱ひ、愛嬌を爲す事等慇懃に就き嚴に之を見習ひて、常に衆人に對し適切、正當の用辨注意を實地に試むる所あるべし、已れの意に介せざる人に向ても親切の行爲に吝なるなかれ『予は之を怠るも彼は之を知らざるべし』と自問自答すべからず、常に快活、崇高なれ、斯く寛大仁恕の習慣を作ることこそ、鄭重の第一着にして、又談話に熟達し、品位を添ゆる基なれ、仇敵なりとて之が爲めに盡す所あらば、之を盡すに於て紳士然たれ、又爲すべき用務あらば彼の爲め遲滯なく用務を便せよ、崇高の感をなし『自ら長所』と思ふことあらば、隱然之を爲して之を秘密に附せよ、一定不

動の主張あらざるも自己の特質、威嚴の爲めに、此の主義を枉ぐるなかれ自ら行ふ事斯の如んば何れに行くとして、自ら心平易に感ぜざるべきかは、

傳へ聞く十七世紀に於ける佛國の美術家、彫刻家カロー氏は、嘗て宮中奉仕の某顯官に譏殺せられたり、當時佛國にありてはカローの彫刻したる自己の肖像あるを見るは、實に名譽、野心の目的物たりしに關はらず容易に之を得難かりし也、然るにカローが加害者に對する答辯如何といふに巧みに運筆の妙を極めて其敵の肖像に附するに、其官職と功蹟を記したる銘文を公にすべしといふにありにり、此事今日に至る迄眞個崇高なる人

物の一例となし、藝壇の佳話となせしなり、カローの行爲たる最高の意義に於て實に鄭重のことたるを失はず、

己と遭會する人の失策、過失を看過することも亦鄭重なるものにして、先づ之を親戚のものに試みよ、蓋し何等の腹立つべき原因あるにせよ、何人にても骨肉親戚の過失を指摘するものを惡むこと甚しきものにして、特に下賤なる家庭にありては之を見て多くは烈火の如くに怒り易きものなり、假りに自己が他人の爲めに受けたる損傷あるにせよ、特に之を語るの要あるにあらずんば之を語る勿れ、是亦鄭重の行爲なれば也

鄭重の件々を列擧せんには其煩に堪へずと雖も、其尤も顯著な

るものを取て之を青年の讀者に示すは無益の業にあらざるべし

自己の知己なる朋友、家族に對して丁寧なる訪問をなし之に對して好意を表するは鄭重也、自己が恩愛を受けたる人に對し、折々書簡を贈るは鄭重の切なるもの也、被服、性僻をば來賓、交友の趣味、感情に合する樣にと勉むるは鄭重也、友人の誇れる知己を訪問するは鄭重也、來客に對して己も樂み、他人をも樂ましむるは鄭重也、同所に會合したるものに對し、極端なる議論、喧すしき言遣ひ、目立つ行動を避くるは鄭重也、自己の家、事務室に來れるものに對し、迅速に椅子を勸むるは鄭重也

己れ敎育足らば、身賤き人に對して愈々丁寧の範圍を擴むも鄭

重也、人を滿足せしむべき正當の事を好んで爲すは鄭重也、他人の年齡を問はざるは鄭重也、年長者、婦人に對して、聊たりとも手助をなすは鄭重也、他人より助力を乞ふ場合にあらざれば如何なる不時の出來事たりとも之を言動に顯はさゞるは鄭重也、他人を喜ばしめ、滿足せしむる爲め、力を措まず、速に之を爲すは鄭重也、政治上、宗教上の見解を異にせる人に向て、自己一家の主張を控ゆるは鄭重也、職責にあらざる限りは他人を詰責するが如き行爲なきは鄭重也、惡洒落を避くるは鄭重也、他人の感情を害したる時、遠慮、躊躇なく之が宥恕を乞ふは鄭重也、下賤の徒之を知らずして往々其跡を晦まし、或は

自ら正しとして宥恕を乞ふを避けんとす、是れ陋也、身賤き人より受けたる贈物は、拒まずして受くるは鄭重也、艱難に困みたる人に對して最上の親切を慇懃になすは鄭重也、痛苦に遇ひ自重の氣乏く、威儀を失ひたる人を掩ひ之を助くるは鄭重也、青年の讀者よ、鄭重の實行は必ずしも金殿玉樓の中に限るものにあらず、茅屋弊舍の間尚且つ之を試むを得る也、何人と語るに際しても之を實地に行ふを得べきものなり、若し夫れ不斷の慇懃、親切と高尚の品位を養はんと欲せば、身體、被服を清潔にし、頭を低くし、心性を純潔にせよ必ずや其域に進むものあるを見るべけん、

▲鄭重と其基礎及び適用▼

讀者よ如上の鄭重に關する修養を志さんには、本章を反覆通讀し、全然其眞意と其規則の應用を實施せよ必ず實用に遠ざかるとの非難あることなきものなり、此外鄭重に關聯したる件々尙夥しく存すと雖も是れ一々書籍より學び得べき限りのものにあらず、彼の品位ある挨拶、頭を正くし、靜かに行儀善く坐し能く語り、忌はしき態度、見苦き作法を避け、食卓に於て體裁能く食事するが如きは皆是れ之に通曉せる人に見倣ふか、又は一々忍耐して之を學ぶにあらずんば不可なり、夫れ然り、然れども　優雅と鄭重の基礎を作るは、他人の力を借らずして自ら成し得べき事にして、又斯くなすこと人間最大の義務なるのみ

ならず、其中に一種の娯樂の存するものあるにあらずや

第九章　物語、逸話、地口に就て

談話の席上善良の物語を語るは必ずしも不可なるにあらざれども、所謂專門的講釋師に類するとの憂もなからんとせば之を避ることこそ善けれ、逸話、地口、引證其他普通談話席上に起らざる說明、形式的頓智に就ても亦此規則を適用すべし、善く語らんとする人は先づ自己の偏僻を避くるに注意せよ、左れど自己の知れる物語の一二を限りて話すは必ずしも惡きことにあらずとは十分根據ある事なり、自己か他より聞き得たる

▲物語、逸話、地口に就て▼

ものを語りて他の笑ひを買はんとするは眞に心地善からぬ事なり、況んや己の知れる同一の談話の斷片を何れの友人にも重複反覆するは尤も賤むべきものなり、予の知れる人にして、某辯舌學教授に關する一個の物語をば自宅にて練習暗誦したる後、機會ある毎に數々之を繰返して語りたる人あり、此の如き人は果して何と評すべき乎予は其辭に苦むなり、

物語を話すは必ずしも惡からざれども、其斬新なるか若くは他人に斬新なりと思はるゝものにあらざる限りは之を語る勿れ、同じく之を話すに就ても所謂時と場所を選むことを知らざるべからず、話すべき必要あらざる時に臨みて、强て之を語るは寧

ろ滑稽の極なり、諧謔書中に見ゐたる左記の例の如きは一讀噴飯に堪へざらしむるものあるにあらずや

『昔鐵砲の物語を知れる老紳士ありて、食事の度毎之を語るを常とせり、或日之を語るの機會なきに苦み、自ら一計を案じ、突然食卓の下の床上を踏み附け叫んで言ふやう「ヤー！　アレは何だ！、鐵砲であるか？、時に鐵砲の事を言ふと……」云々と前提を興して例の話に入りたりといふ』

又之に類似したる例あり、嘗て人あり有名なる某神學家と相會したれば、聖書に關する智識を充分表示せんと思ひて、久しく沈思すれども、未だ何事も念頭に浮び來らざりしが、終に突然

▲物語、逸話、地口に▼

叫んで曰く、『予はサムソンは古今未曾有の強力の人なりと信ず』といへば坐中の一人之に應じて『否とよ、君こそサムソンに優りて強けれ』といひぬ相手は喫驚の餘り『何故にや』と問ひしに、『そは、いま頭、両肩迄も當りを搆はずサムソンを引摺り下したるは君にあらずや」と、噫此の先生、確に大失策をなしたる人也、

要するに諧謔は野卑なり、奬勵すべきものにあらず、又物語を話すに於ても無用の言辭を省畧し、簡潔、明晰を旨とすべし、語る所にして可笑しきものなるも自ら笑ふ勿れ、自ら笑へば人を動かす能はず、聞かずや最良の講談師は、他人の音聲、口調

を眞似ずと、蓋し外國人の事を述ぶるにあらざれば、之を眞似るは野卑、下品の傾向を生じ易きものにて又外國人を眞似ると雖も斯かる場合に於ては誇張的言辭を避けて上品に之を表示し得るものなれば也、

舊き昔噺に新しき日時と人物を加へて、新き物に作り代へるなかれ、これぞ狂愚の標本にして他人の之を知るあらば必ず笑や輕侮せれらるべけん、予は某自稱紳士が數百年前の昔噺をば、眞面目に得意然として隣家に到りて自己の經驗したる實話なりと吹き立つるものあるを見たり、區々たる諧謔を語らんがため自己の眞直、名譽ある品性を損傷して顧みざる人物は、果して

如何なる人なるぞや、

物語を話すに際し戯曲的演習に力を注ぐを避けよ、そは是れが爲めに『演じ過ぐる』の弊あるのみならず、自負心よりして卑賤なる諧謔に陷り人をして不快の感を抱かしむるものあれば也

左れど予は歐洲大陸の人士が好んで語れる物語にして自然の諧謔現はるゝものを排斥するにあらず、虚榮心より來れる結果は明白にして尤も憂ふべきものなれば斯く戒むるなり、

物語を述ぶるに際し、自ら話中の主人公たるを好むものあり、他人若し之を聞て、『君は予が先日言殘したることを聞きたりや』と問はれんには一言半句も辭なかるべし、人に因ては、物

語に前提を置き『こは予の經驗したる實話なれども已に市中に傳はりたるものなれば、君も已に聞きしものなるやも知れず』抔言ひ逃るゝものあり、又或人は『予は之を某大家に語りたりしに、機慧の頓智を含めるに因り大喝采を博したり』などいひ甚しきは『こは印刷に附するに足るべきものにあらずや』など問ひ掛けて、他人の小稱揚を誘はんとするものあり、何れも拙劣、賤陋の極と稱すべきもの也、

『不道德』といふことに心附かざる人にありては無骨の談、穢はしき諧謔を語り快然として自ら喜ぶものあり、此種の滑稽、頓智は己れ經驗したると、他より聞きたるものとに論なく、均し

▲物語、逸話、塊口に就て▼

く野卑たるを免るべからざるものなれば、予は青年讀者の談話に巧ならんとするものに對し、斷じて之を聽かざらんことを警告す、是れ青年純潔の心志を變じて不潔の色に染まらんことを恐るれば也、假例不潔なる體裁、身體上の不潔にして忌はしき話、便所便器に關する逸話、大職冠鎌足公亞流の實例、肉體上の過度なる話、不健康の話等は一として清心快意の問題にあらざれば堅く之を語るを禁ずべし、如何程、申譯、前置をなしたりとて其罪容赦さるべき性質のものにあらず、又之を聞く人の心に起りたる不潔なる感を除くこと能はざるものなれば也、彼の單純なる『滑稽的邪惡的』諧謔は直に忘れ易きものなれど

も、汚穢なる諧謔に至りては永く腦裏に染浸して脫し難きものなるは人の知る所ならずや一旦汚穢に浸潤したる青年は、此の醜惡を受くるの器となること容易なるものなり、又田舍の下等社會に入れば、敬神の念厚く不道德に亘ることは、聊かたりとも爲すの意なき人にして、都府在住の邪惡の俗物輩までも忌はしく感ずる如き汚穢の言語を吐とは往々見受くる所なり夫れ兒童の心を深く研究したる人は、此の如き不潔の行爲の漸次發達の結果、春期發動の頃に至りて、一層惡習を釀すに至ることは予と其所見を同ふするなるべし、是れ兒童が天性其嗜好あるにあらずして實は是れ『野卑なり』なりとして往々罵らるゝこと

▲物語、逸話、地口に就て▼

あるも、罪害物として非難を受けず、所謂『諧謔に假托する汚穢』に感染するに因れるなり然らば則ち之に對しても十分の警戒を要すべきものなるや今更辯明するの要を見ず

讀者よ不潔の言語には毫も宏壯、快活の意味あるものにあらずして、下賤の頓智と滑稽は、畢竟教訓足れる人の冷評を受くる具に過ぎざることを知らば、思半ばに過ぎん、

逸話も亦嶄新なるを要す、舊き逸話は輕蔑を受くるの具たるのみ、佛國の某著者は、『最良の逸話を語るにも極めて簡潔なるを要す、蓋し逸話は千篇一律に過ぎざるものなれば、滑稽、趣味兼備の人も僅かに一大機會に際して之を適用するのみ』といへるもの、寔に肯綮を穿つの好評といふべし、されど善良なる逸話を巧みに語るは談話に於ける至大の助力をなすものにして又以て好個の説明の器たるべし、彼の全然逸話を語らざる人は概して活氣なき輩なれば、往々其人自身こそ逸話中のものなりといはるゝなり、

左りとて予は某談話法著者の如く、我が案出したる地口、謎も悉く之を他人の發明に歸せしむべしと主張するものにあらず況んや某氏が一歩を進めて、『かくて己れ社會に立つて成功せる人物となるに至らば、一時他人の考案と稱するも後日直に之を自己のものとして取戻すことを得べし』といふに至ては愈々

▲物語、逸話、地口に就て▼

首肯し難き言なりと信ず

若し夫れ語る所の滑稽は悉く我案出なり云々と揚々然として一語一什を聽客に告ぐるが如き事の必要なきのみならず、品位宜きに協へるものにあらず、讀者よ斷じて之を學ぶなかれ、己れ面白き趣向ありて之を口に現はさば、如何でか之に伴ふ好評の到らざるべき、純良の諧謔談と巧妙の滑稽談は敎育ある人士の之を見るも、品位を損するものにあらずして却て言語を潤飾するもの也、左れど類似の話材を思出さんため絶へず用語に苦むが如きは誠に賤むべき事共にて、所謂本職の諧謔家が世間より尊敬を受けざるは亦之が爲めなり、

善き地口は決して輕蔑視すべきものにあらず、其中往々道德的敎訓を與へ美なる品性を示し、愛嬌と優美とを添ゆるものなり特に時事に關する地口は、一大有力のものにて、以て之を後世の歷史に記するに至るべし、チャールス五世が之に因て其本性を發揮して、自己の權力とフランダースの繁榮を說明したるものあるは讀史家の洽く知る所なり、

讀者若し諧謔談其他之に類似の書を取つて之を讀み、如何なる滑稽、諧謔の世上に流布しあるかを知らば、頗る利益多からん況んや諧謔の趣味を有する人にして、之に關する書籍を涉獵せんか、謹重の態度を以て之を避くるは拙劣の諧謔談を爲すに優

▲質問と、其不適用、利用に就て▼

れるを悟るべし某著者曰く『何人も諧謔の書を讀むを要す是は陳腐の言を吐きて他人の不快を買はざらんがためのみ』と亦味ふべきの訓戒ならずや、

第十章　質問と、其不適用、利用に就て

何事にあれ、先方より忌はしき應答を豫想し得べき質問をなすなかれ、斯くいへばとて、予は彼の好奇心を滿足せん爲めの質問をいふにあらずして、屢々一種の人の爲す質問の體裁に就ていふものなり、故に此の欠點として見るべきは質問を受けたる

人が如何に答辯して可なりやと困難を感ぜしむるもの也、今若し假例普通の肯定的言辭を以て答へ得べきものなるに、質問者か『好い天氣です』と言はずして『天氣は好くないか』といふの類是也、若し眞個に其意を味はざれば、質問を受けたる人は如何に應答して善きやと、之が爲めに大に躊躇するに至るもの

なり、

又會合の席上にて質問者は『君は甲孃の衣服に就て如何と思はる丶や』と一矢を放つ、こは是れ其人をして他人に對し是非共面白からぬ言を吐かしむる手段なるか、若くは之をして巧に誘惑に陷れしむる方法なり、斯かる手段にて他人を不信任の地位

▲質問と、其不適用、利用に就て▼

に置くべき質問を放ち、自己のみ善き人たらんとするは、如何にも立派に見ゆるれども、其實は怜悧にもあらず又人の信用をも買ひ難きものなり人に因ては斯かる質問に答ふるは明かに好ましからぬとの體裁にて、殊更笑顔を作り、『エー、理解りました』、『アー、友人ですか？』といふものあり、素性卑賤の婦人にありては、此の如き方法もて答ふこと頗る機敏怜悧の沙汰なりと思ひて、遠慮會釋なく之を用ゆれど、こは是れ一種の戯弄なるものなり、讀者は談話中に一再ならずも『君は甲氏又は乙氏に就て何と思はるゝや』と漠然質問するものあるを見ん、こは固より新事實を聞かんためにもあらずして、其人の弱點、

欠點等を打明けあれかしと期待するに過ぎず、斯種の人物は至て危險のものにて社會の蝮蛇なり、故に此種の人物は勿論、其無禮の言、容喙、無益の質問に至る迄も悉く避くるは一個の技術なり、左れば泰然自若たる談話家にありては、斯かる質問に應答するに先ち、長き沈靜、不動の凝視を注ぐを以て、應答となすことの極めて易々たるものあるを知らん、

然れども質問を起す事往々眞個慇懃、親切の仲介たることあり人々は總て有無相通ぜんとする心あるものなれば、其必要ありと雖も、常に機敏怜悧なるを要す、自己の功績を語らざる謹直の人も、面白き事を他人に語りて他人を娛ましめ、且つ我が確

▲無遠慮、厚顔、熟親に就て▼

信せる方法にて語りたるを喜ぶなるべし、

巧みに質問を爲すの方法は、之を研究するの必要あるや明かなりと雖も、要するに豫め多少の言譯、辯解をなし置くべきは一般の通則たるものにして、質問の際常に忘却すべからざる事に屬す、

第十一章　無遠慮、厚顏、熟視に就て

鄭重の行爲、心智の敎育善く談話を潤色するの人は、禮法上の反則たる無遠慮を遠くるものなり

茲に又全然卑賤なる社會にあらざるに猶且そ無遠慮を事とする

一階級あり、謂へらく世に無遠慮なくんば交際社會は沈滯、不振の地に沈淪すべしと、抑々斯かる感を起さしむるものは『婦人に對しては無遠慮の如く成功するものあらず』、『危險を冒さざれば何事も得ず』、『眞鍮も金に優れり』『問はざれば何物をも與へられず』等の格言に刺戟されて現はれたるものなるべし

尙一歩を進めて此輩の眞意を解すれば、人の謙讓、社會共通の禮法も、他人の娛樂として責罰を免るゝ場合にありては、之を犯冒し之に侵入して差支なきものなりと思ふ也

青年の讀者よ、無遠慮にて爲し得らるべき事も之に代るに謙讓、品位ある作法、尊敬の三者を用ひなば更に一層の効益を奏

▲無遠慮、厚顏、熟視に就て▼

するものと、始めより覺悟する所あらしめよ、

思ふに確信、自任、勇進、大膽は、一として無遠慮と共通の點を有せず、見よ世上の大膽勇敢の行爲は事情の許す限り、毫も他人の感情を害することなくして成したるものならずや、

世に乘車中坐する能はず、旅館の食卓にて命を下す能はざるの人あり、一言以て之を掩へば、他人の耳目に觸るゝ間は、無遠慮と虚榮を示すにあらずんば、何事をもなし難き人物あり、此輩は詐欺師の如き調子にて事を人に問ひ、自負自尊の調子にて新聞紙を朗讀するもの也、此輩は尤も怒り易き人物にして、其故は自己の先輩のなす所を屢々見て之を理解したれば、之に倣

ふて其專横の擧行を學び、自ら怒り易きに至る也、

世上に普通なる下賤の極なる無遠慮は、婦人を熟視するにあり

公衆の間にありて熟視するが如きは、尤も非理的行動なるなり

況んや止むを得ざる事情の爲めに自己に接近したる機會を利用して熟視するは尤も賤むべきの擧動なるをや、

食卓を隔て、若くは鐵道馬車中にて間斷なく婦人を凝視するが如き人は、確かに之を拘引すべき價あり、無教育の徒往々之をなして謂へらく、こは婦人に對して心地惡き事にはあるまじ、却て愛嬌の意を表するものなりと、噫是れ何等の狂人ぞ、知らずや婦人は、之が爲め苦惱する所甚しきも靜かに之を押隱し

▲無遠慮、厚顏、熟視に就て▼

つゝあるを、彼等の之を細省せざるは愚なり耄なり、予は嘗て旅館にて貴婦人の一組が他人の熟視に遇ふに堪へずして數時間其食事を停止して非常に苦惱を受けたるに止まらず、此の如き自尊家に見らるゝをだに避けんがため、旅館を逃去りたるの例を聞きたりき

予は又所謂『第一流』的人物が、他人の棧敷にツカ〳〵と推入り偶然にも空虛となりたる前席を占めて平氣なる人を見たり、そは該棧敷にありたる二組の客は、必ず其一方の組の知己か友人なるべしと默許なし居たりしに、豈に計らん、此は双方共に未知の人物なりしと、假りに斯かる無遠慮の行爲に因て偶然の

利益を得たりとするも、之が爲めに其不遜なる性質を理解されて永く擯斥せらるゝに比すれば其利害到底償ふものにあらざるを知るべし、さはいへ、此種の無遠慮は固より不遜たるを免れずと雖も、萬人が認めて滑稽視して宥恕するものなり

何事にあれ、適切なる已定の規則を犯すことなかれ、性質勇ましく獨立の氣に富める女子も公共地に於ける禁制の花卉を折り面白からぬ應答を豫想すべき質問をなし、他人の私室に闖入することなかれ、青年輩も亦同樣の作法を遵奉して他人の感情を害するが如きことあるべからず

常に他人の爲せる無遠慮の行爲を打破し、不遜の輩に對しては

▲議論家と自己の正當を主張する人に就て▼

斷じて恩愛を施すなかれ、蓋し此輩は家庭教育足らず自信備はらず、其所謂信實なるものも隨分疑はしきものなれば也、畢竟不遜とは他人の權利に對して、自己良心の缺乏せるを表示するに外ならず、憐むべきかな、

第十二章　議論家と自己の正當を主張する人に就て

交際社會又は第三者の前にありては熱心なる議論を避けざるべからず、自ら我が正當なるを證明する人は一面に於ては他人が不當なりと事を表示するものなり、況んや證據人の前にて斯

く主張するが如きは、家庭教育の良からざるものなれば、如何なる時にありても之を避くることこそ穩當なれ、

總じて男子は女子よりも議論好きのものにて、其謬妄の事なるに思ひ到らざるぞ淺ましけれ、勿論己れ心中にて議論を凝らすは惡からざれど漫に他人と議論を戰はすは、單に我が虛榮を發表するの外毫も得る所あらざるべき也、況んや才能充實せる人にして意志、經驗、教育共に自己に劣れるものと議論を交ゆるが如きは笑ふべきの極なるに於てをや

己れ若し某々問題に就て、一定不動の見地を有せば、全然自己と所見を同ふせるものを除き之に就て多く語らぬ樣に警戒せよ

▲議論家と自己の正當を主張する人に就て▼

所見を異にするものと語りたりとて、毫も自己の主張を助くるものにあらず、己れ若し大膽なる攻擊を受くるも、直に之に對して議論の矢を射たずして大人しく避くるこそ自己の品位を崇敬ならしむるもの也、斯く一歩を讓るの人は婦人の尤も尊敬崇貴する所なり、況んや議論に至らずして之を拒むに於て一層其人の熟錬、怜悧の現はるゝものなるに於てをや、又況んや議論を避くる人は敵手を不快の地に置かしむべき一大利益を享有するに於てをや、

議論好の來客を受けたる人の不便と、常に自己の正當を證明する人の不利益は、左記佛國物語に就て充分説明さるゝべきもの

にして、自負と議論を好める輩に對し頂門の一針たらずんばあらず、名詩『季節』の作者として、經濟學に關する著作家として有名なる學者某氏は、一日セン、ラムベル侯を通じて、當時第一流の文學者を其家に集めて名聲嘖々たるゼオフリン夫人に紹介せらるゝに至りぬ、

セン、ランベル侯の紹介は夫人に取りては殊更有力なるものなれば、夫人は彼を遇すること頗る厚く爾後三ヶ月間此學者は夫人の許に出入して好遇を受けたり、彼は學識趣味兼備の人なれば何人も之と交るを厭はざりしが、或日のこと例の如く夫人の玄關前に行きしに、家僕は嚴然として彼の入るを止めて云へる

▲議論家と自己の正當を主張する人に就て▼

樣、『夫人は今日は御目に懸れません』と、彼は之に應じて『左れば夫人には外出にてもせられたるにや、予はモレ氏、トモ氏、デリュ僧正も話しつゝあるを聞けり、慥かに在宅に相違なかるべし』といひしに、『イヤさ今日はドウあつても御目に懸れません』とありしかば『では夫人は御病氣にてもあるのですか、併しデレロ氏の笑聲が外に洩るゝのを聞ても御病氣とは思へないが……』『今日は幾重にも御容赦を願ひます、夫人はドウあつても今日御目に懸れませんと只一言申上げます』

斯く家僕の堅く執つて動かざるを見るや彼は一禮して立去り翌日に至り前日の一語一什を語らんが爲めセン、ランベル侯の許

に赴きぬ、

彼は其面會拒絶の理を知るに苦みぬ、彼果して他人に迷惑、不便なる言語を發せし乎、彼果して過失をなしたる乎、再三再四深省して彼の不當にしてゼオフリン夫人の正當なりしかを思はんとすれど其理を悟るに苦めり、侯は其言ふ所を詳かに聞き取りて、彼の滔々流るゝ如き辯疏を遮りて『我友よ、君の言如何にも正當なり』といひ終りて、傍より一通の書簡を取りて其封を解て之を彼に示し、且つ之を讀むべしと告げぬ差出人は言ふ迄もなくゼオフリン夫人にしてセン、ランベル侯と指名しありけり、其中の一節に

▲議論家と自己の正當を主張する人に就て▼

『前略 私は閣下御知合の某氏に對して、遺憾ながら私の門戸を閉すことゝいたし候萬一幾度となく同氏に面接致し候へば、壽命縮まるべく候、閣下の友誼に厚きは、如何にも感謝の意を表し候へ共、貴下の御知己の〇〇氏に就ては最早難堪相成り申候、彼の人は不斷、自己の正當を主張され候』

此書面中最後の數語は彼に對する萬事を説明して餘りあるものなりければ、侯は之に就て常に正當を主張することの危險にして、時には不當となることの必要あることを諄々説き聞かせぬ曰く些細なる意見にても決して屈せず、又常に己の言を論理、推理、眞理のみに置て他人の言を顧みざる人は決して善からず

彼の學者ば今や侯の訓戒に從ひ、交際方法を改め自己の言責を守りたりければ、幾何もなくして夫人の滿足を買ふに至れり、斯くて前に自己の擯斥を受けたる社會にありて最も快活の人となり、其談話は、頓智、滑稽相交はりて幾多成功の道を與へ終には經濟學者たる名聲を毀損せすして善く當代に於ける完備の人物たるに至れりといふ云々』

見よ佛國にありては、議論せんとて一定の決心を表示するを以て、無作法の極となすものにして其意味明白也、故に全國の下等社會に於ても『ア、、彼は自己の正當なるを證明せんと思へり』（"Tiens! il veut avoir du raison"）の一句は輕蔑の意を表

示するものとして語らるゝにあらずや、彼れ二人の論客が火花を散らして論戰をなしたるがため、折角の晩餐會を不快に歸せしめたるを目擊したるもの、高聲を擧げて口論せるに因り主人公は全會の平和を破らんことを恐れ、涙ぐるみにて苦悶の色を現はせりとの小談を聞きたる人は、予輩と所見を同ふして交際社會に於ける議論の眞に謬妄のことたるを疑はざるべし、常に正當のみを主張する事の謬妄なるは之に就て見るも又愈々明かならん

第十三章　婦人の勢力と已婚婦人に就て

世界に名高き才人の集會は、主として男子より成りたるものなれども、亦婦人に圍繞されざるものあらず、遠くは希臘の俊秀が才女アスパシアの周圍に集まりたるを始めとし、近くは前世紀の佛國宴會に至る迄、皆是美人歌女を中心點として起りたるもの也、若し夫れ何れの時代を問はず、總て高等教育ある談話家が當代の精神に大感化を與ふを見れば、精神鼓舞の功績之を婦人に負ふ所大なる者あるを知らん、英國のジョンソン博士とオリヴァ、ゴールドスミスの二人が、談話上の才能の著しか

▲婦人の勢力と已婚婦人に就て▼

りしものは、之を其天稟の奇才に歸せざるべからずと雖も、彼等にして尙且野鄙、偏僻なる欠點を免がれ能はざりしものは、少壯時代にありて敎育、精錬足れる婦人と交際せざりし罪に出でずんばあらず、チエスターフイルド卿が頓智、精錬の特長は卿の述懷談の如く、奮て婦人社會に來往したゝに因る也

社交術に熟達して敎育あり、機才ある婦人は、欵待の才に加ふるに自己の周圍の社會に一大感化を與へ、他人を導いて清快ならしむる力を有するものなり、學者、技術家、隱退の習僻ある人は、單に婦人と會見したるのみにて足れるものにあらず、須らく一歩を進めて、其退隱の僻習を脫し得べき敎育充實せる交

際社會に出入すべし、其愉快亦量るべからざるものあらん、彼等にして才藝ある女主人役の前にあらんか、其思想は一層精錬せられ、其粗雜の智識的金剛石は、切嗟琢磨を加へて愈々人目を眩射すべき光彩を放つに至らん、

かゝる婦人にありては喜んで自己の盡すべき天職を盡し、萬人を娛ましめて自己の主要なる義務と思ふものなれば、己れの前に來る人には極めて慇懃丁重を極むるものなり、

學者、僧侶、退隱の習僻ある青年にして平素婦人より毫も注意を受けざるものは名高き美人、天晴れ交際社會の主領株の婦人を見て追從便佞の徒と思へるも、一旦丁寧極まる眞實の取扱

を受くるに至りて大に喫驚したるの例は決して珍しからぬ事也
是れ彼等は他人を充分滿足娯樂せしむるは才藝ある婦人の務む
べき所なるを解せざれば也、若夫れ才能教育充備の婦人にあり
ては一層其手を廣げて衆人に對し愈々其光輝を發するもの也
是を以て斯かる婦人に接見する人は其感化を受けて他人を樂ま
しめ、又社交を快活ならしむべき技能の發達尤も顯著なるもの
にて其受けたる感化と利益の大なること殆んど測るべからざる
ものあり、有名の政治家、偉大なる宗教家、高名なる詩人は、
才藝ある貴婦人と其友人の間に談笑喃々して一夕を送るを以て
區々娯樂に過ぎざるものと思へども是れぞ大なる謬妄の甚し

きものにて、其純良なる感化が才人を驅りて新なる天才を發
揮するに力あるを思はざる也、蓋し才人固有の思想は孤獨單獨
寂寞の域よりも、交際社會に出づるに於ては其發達すること愈
々大なるものなり、
斯かる婦人と交際を求めて我が手腕を磨くは男子の義務なり、
婦人の才能あるものは自己を利益せしむべき人を集むることを
勉むるは其義務なれば交際場裏に立つべき手腕ある婦人は讀書
に因て何人とも面白く談話し得るの力を養ひ、自己の作法上の
虛榮心と人に不快を與ふる言語を除去して、心地善き感情を與
ふべき長所のみを存すべし、女子にして之を成就するあらば交

▲婦人の勢力と已婚婦人に就て▼

際社會に立て無用の人に終らざるべき也、

英米兩國にありては、精錬の社交とは、富有に因て成るものなりと信ずる人多きは、慨嘆すべき事ならずや、左れば一夕を面白く過さんには豐美なる晩餐、高價の衣服等を用ひ集會を以て宛然祝祭日視し多額の費用を賭して準備するを常とせり故に天性品位あり、善行を以て世に立たんとする婦人にありては、斯かる交際社會に出るを憚かり、自己の勢力範圍を我が家庭に止むるに至れるは亦止むを得ざる次第なり、左れば教育、經驗に富める已婚婦人が、其正當なる勢力範圍より閉され爲めに少童少女のみが代て其全權を握るの奇觀を呈するに至る、斯くて才

智は上より下に移り、會合して何を討究したりやといへば、僅に『人の寄集まりたる』と答ふの外なきのみ、

斯かる弊風を矯正せんには、盛宴を張らずとも虚飾心を去て善く友人を接待し得べしてふ思想を腦裏に置くを要す、左れば他人より訪問を受けたる婦女は之に對して十分の注意を拂ひ、之をして談話を進ましむれば足れるものにて、晩餐の調理宜しきや婢僕の過失なきや否やの如きは無益の憂慮に過ぎざるなり聞かずや、米國婦人は其結婚の指輪を得るに到れば交際的勢力を失ふを嘆ずと是れ一理あることなれども、之を矯正するも亦彼等婦人の力に存す、其第一着手として、先づ飲食を備へて知人

▲婦人の勢力と已婚婦人に就て▼

に接待せざることを要す、米國の田舍にありては舊式の宴會今尚行はるれども、現に米國の大都府にありては飲食物なくして來賓を接待すること已に十分の効果を奏せるにあらずや

青年輩は談話の卓絶と作法の精錬は、飲食の慾を制するに因て容易に得らるべく、又飲食せずんば社交を樂む能はざる輩は憐むべき小人物に過ぎざる事を肝銘するを要す、夫れ他人を感化せんと欲せば己れ自ら食慾の爲めに感化せらる事あるべからず

下級社會の人は、食卓に目を惹くべきものを置かざれば、清快の會合を豫想する能はざるは事實なり、才智開拓を目的とする人にして是を思ひ彼を懷はゞ、飲食物を目的とせる社交の如き

勉めて之を避くるの優れるものあるを知るなるべし、

青年に向て婦人社會を研究せよと忠告するは殆んど無用の業に屬す、されど讀者は女性中にも各種の差別あるを知るを要す

彼の年若き婦人にして、其心を研かず、其讀物は下等小說に止まり、其談話は主として他人の私事に亘り、其批評は多くは冷評、侮蔑の調を帶べる輩は之と共に談話すること常に不快なるに限らざれども、理性的人物、若くは己が心智を磨きて世に處せんと思ふものは、斯かる女子と交誼を結ぶの必要あるを見ざるなり、

若し夫れ眼に萬卷を涉獵し、言々句々眞摯の外に出でず、以て

▲婦人の勢力と已婚婦人に就て▼

交際社會に出でんとするに力めんか必ずや己れの嗜好に適すべき社會あるを見出すに至るべし、

凡そ長幼を問はず、世路の經驗に富み、才能ある已婚婦人と談話を交換するは自己の心性、作法を改良せんとする人に對し、尤も奬勵すべきの事なり、『良妻を得んとせば數多き良妻を研究するの必要ある』が如く、交際社會に立たんと欲せば之を下級より始めずして上流社會より始むべきこそ善けれ、故に才能を輕視せる女子と徒らに雜談に耽りて貴重の時間を費さんよりも、智能に富める婦女子と相會同して思想を交換するの利益の遙かに大なるものあるを知るに至るべし、

第十四章　談話に於て忌むべき問題

讀者にして交際社會に立つ人は、ジョンソン博士がいひたる『容貌美麗の人には往々汚れたる思想あり』てふ批評を思起すことあるべし、斯くいひたればとて、予は不道德又は猥褻の問題をいふにあらずして、實は不快なる問題換言すれば可成避くるを良とする問題に就ていふなり

善き敎化ある人は、何れの點に於ても極めて清潔たるべきは、恰かも自己の義務にあらざれば自己の思慮を回らさゞると均しく、重要なる習慣に屬するものとす、然るに世上往々得々然と

▲談話に於て忌むべき問題▼

して己れの清潔なるを誇るものあり、此の輩こそ何れの社會に行くも、好んで便所の話等を取出し、或は好んで自己の疾病を言ひ、何人に對しても憶面なく胃弱、肝臓病等の談をなすものあり、或は豫め容赦を乞ひて身上の事を語り、然らずんば自己の病狀を細かに述べ立て、約束に違背したるを謝するものあり、

敢て問ふ、自己が食慾の有無如何を語りたりとて誰を樂ましべき乎、又多人數の前にて自己が食事せざるとのことを語るは果して來賓を娯ます所以なる乎、大聲を擧げて多人の食慾を評するは果して作法に協へるものなるか、婦人にして來客の前に

て、食慾少なきを語るは果して人に心地善き感を起さしむべき乎、吾人と雖も齒科手術、緊縮せる履より起れる苦痛、行狀惡き奴婢の忌はしき擧動、小兒の齒痛、服藥の効果、變事、死亡の起るものにして又多少之を討究するの要あるを知る、左れど性質快活の人は談話中人の感を害するが如き問題を避くれども、下賤の人にありては、遠慮なく之を持出して主張するものなり、蓋し此の如き事を語るの必要を證明するは易々たる業に屬すと雖も、修錬ある人にありては悲哀、私事の談を避けて悠々高談し毫も不便を感ぜざる也、

吾人は確信す本章に記述したる事項は、獨り青年讀者が交際場

裏に於て心懸け置くべきものなるのみならず、親友人間にあり
てもかくすべきの必要あるを信ずるなり、蓋し上掲の不快又は
身上の問題を語るの習癖を作らんには亦何れの時にありても之
を口にし易きものなれば、常に注意をなすことこそ重要の事な
りとす、此の弊風を匡正すべき問題は根本にあるものにて枝葉
にあらざることゝ知るべし、

第十五章　奇論に就て

普通意思強固なる人は、眞面目なる談話を好み、殊に其長きも
の或は古風の諧謔を以て甘んじて樂むものなれども、かゝる形

式的諧謔を婦人又は經驗ある快活の人士に試みるも毫も効を奏
せざるべし、
倶樂部の席上湧くが如き笑聲を起さしむる逸話も、接待の席上
にては、殆んど無感覺のものにして、之を輕跳なる少女に私語
くも、毫も奇効を奏せざる也、
こは何故なる乎、讀者は婦人とても人を娯ましむる諧謔を好む
點に於ては男子に類似するものあるを知らざることあるまじ、
故に男子の友人に對して已に奇効を奏したる諧謔談も之を婦人
の前に持出すに先ち再考すべきこと安全なれ、
已に前にも述べたる如く頓智、戲謔の體を帶びたる愛嬌は、誰

人に對しても心地善きものなれど、奇説も亦善く傾聽の價値なしとせず、蓋し奇説なるものは一見謬妄の如くに見られごもよく〳〵之を味はゝ、其實眞理を含むものにて、之を言はれたる人は直に其眞意を解するなるべし、今一例を擧げて之を言はんに、繪畫室に於ける一婦人の容貌を指摘して、『こは美人中の醜女なり』とか『凡庸婦人中の最美人なり』などゝいへば一個の奇説にして、其言中吾人の意を惹くべき特殊の風丰に關して多くの眞理を含むものなり、又『事實程虛僞なるものなし』といふも一個の奇説なり、そは其中に尤も正確なる眞理の意味あると同時に、一面に於て眞理を打消すべき應答に用ひらるゝもの

のなればなり、更に他の例を擧げて言はんに、『國家の爲め最後の濠に投じて死せんと願ふ人は、最初の濠を避くるに注意するものなり』『利口な馬鹿程馬鹿な者なし』の如き類、立派なる奇説として見るべきもの也、

奇説は時に或は應答の體にて成すことあり、さる婦人嘗て某寶玉店頭の美麗なる摸造金剛石を指して『かゝる立派なダイヤモンドを見たことはありますまい』と問ひしに『如何にも、何處の硝子工場でも見受けたことはありません』といひたり、又或る文盲の人少女に向て『自分は本を讀む樣に貴女を讀むことが出來ます』といひければ、少女は『私も左樣思ひます』と靜か

に答へたり、奇説は容易に之を研究し得べきものにて、若し重大問題に就て奇説を立つるものあらば、十分深省を要すべきものなり、思ふに奇説は地口と同じく之を用ゆるに慣るゝこと容易なるものなれど其地口に優るの點あるは、其中に一個の思想を含蓄すれど地口は言辭、音聲上の遊戯に過ぎざるものなればなり、

奇説は決して談話に於ける重要なる要素にあらず、又屢々反覆すべき性質のものにあらず、諧謔的議論にあらざる限りは長く之を用ゆべからず、然れども平凡の思想を活氣ある形式にて表示するの方法としては研究の價値なしとせざる也、

然れども往々此種の方法に因り言語思想を表白するを難ずるものあり、仮の特殊の研究をなして他人の非行欠點を指摘するに躊躇せざる輩が、其新機獨創の見を以て普通人を驚倒するが如き是れなり、才能自己と均等の人に對して奇説を用ゆるときは一般交際社會に相應せざる痛論にあらざる限りは反抗を仕向けらるゝことなきものなり、此才能ある人の無害の主張、意見を全然排斥し若くは非難するは不親切、怯懦の事たるを免れず、奇説に慣れざる人に對し、極端の方法にて奇論を主張するは往々豫想外の結果を惹起すことなきにしもあらず、其一例として語らんに、嘗てワシントン將軍を濫用して婦人社會を驚かし一

▲些少の機牲に就て▼

夜を過ごしたる一紳士ありけり、彼自ら誇て他人を驚動せしめたりと思ひしに、其結果如何といふに其人は果して正氣の人なりやと疑はれしに過ぎざりし而已、

第十六章　些少の犧牲に就て

凡そ人他人を娛むしむるため、瑣事に就ての我儘なる心を棄つるにあらざれば、社會に立ちて成功し、若くは談話に卓絶するに至らざる也

世に名あり、才藝に通ぜる人にして往々非常なる我儘勝手の人物あるは眞實也・左れど此種の人は、瑣事に就ては一歩を讓る

てふ機敏の手腕を有するものなれど、寛大の人も其性質不快活よりして他人の便利を謀り、自己の細事を棄てんと思はざる人物あるは、往々見受くる所なり、

婦人にありては（悉く然りと言ふにあらざれども）寛仁高貴の行を以て其義務となし、又小なる犧牲、些少の親切も、献身的尊敬のものと見做す也、故に殘忍、無主義、無慈悲と言はる人が、往々『美なる少女』に愛せられて、其同僚を驚かすことあるを見るあり、蓋し道德的教育如何を問はず、思慮淺薄の婦女より之を見れば、大なる德行は英雄的事業に近きも、小なる德行は之より一層大なるものと思へる也、如何に德行高く偉

▲些少の犧牲に就て▼

大の人なりとて、小德を無視し、若くは他人の娯樂の爲め己れの些少の慰樂を棄てずして可なりといふ理あるべからず、如何程道德上潔純の人なりとて、食卓に於て暴食に耽り、談話をなすに野鄙に、折々主人役を戲弄し、ジョンソン流に習ひて同僚客を侮り、己れが講演をなす時間の來る迄は、安樂椅子に倚りて平然たるが如き擧行をなして差支なしとの申譯は立たざるべし、然るに英國今日の宣敎師若くは下級社會にありては此種の行爲普通にして敢て怪むものなきこそ遺憾ならずや、斯の如き實例あるは青年に非常なる害毒を及ぼすものにて、之が爲め忽ち青年をして精錬、丁寧、善良と、他人を害すべき我儘、下

賤とは一大關係あるものなりと誤想せしむるに至れるものなり凡そ才人なるものは丁寧、克己等を免れんとするものにあらずして、却て率先して之を勸むるものなり、其理如何といふに、予の已に語りたる如く、第一、總て才能なるものは社交場裏に出で他人と交際するに因て完成圓熟するものにて、第二、大才能ある人は、自他互に娯むことに通曉せるの人なれば也、小なる犧牲の最も心地善きものとして見らるゝは、主人役を助けて會場に活氣を帶ばしめ、來客をして洩れなく談話をなさしむるにあり、勿論會場の一隅に於て、晩餐の來る迄婦人と談笑して他を顧省せざるが如きは眞の愉快なるに相違なけれど

▲些少の犧牲に就て▼

一人若し此法を取らば、他人も亦之に傚ひ、終に來客皆各一個の組を作らざるを得ざるに至るべしこは是れ會場の沈滯を厭ふ人に取りて忌はしく感ぜらるべきもの也、斯かる場合に際しては自己の話しつゝある友人に訴へ、又は主人役に語る所あらば、城廓自ら壞るゝに至るべし、蓋し交際社會に於ける婦人にありては、己れ談話に倦みたるときは相手の紳士をして談話を休止せしむべき道を取り、紳士にありても、先方の婦人が他人と談話せんとの意思あるときは、決して怒るものにあらざることを熟知するものなり、

臨席の來客中に自己の知己なきを知れば、他の方法を取るも亦

可ならずや、是れ少しく心を用ゐるに於てはさまで困難なるものにあらず、左れば友人に就て誰々が來り居るやを問ふも可也斯くすることは己を娛ましむる人と懇親を結べる端緒たるべき機會を與ふるものなれば也、斯かる際に於て未知の人が己と懇意になるべき機會あらば出來得る丈けの注意を用ひ如何にせは互に興味を生ずるに至るやを思はざるべからず、

己れ音樂に關して、何事か知れんことあらば、唱歌、奏樂を以て、全會を賑はしたる婦人に紹介せられんことを乞ふは誠に當を得たる事にて、如何なる歌人とても其技能人を感動せしめて終に紹介を請ふに至れるを見ては、忌はしく思ふものはあるま

▲些少の機性に就て▼

じければ也、又聲名高き人が、其席上にあるを見ば、之に知遇を求むるは自然の情なればなり、或は己れ主人と懇親ならば、他人に紹介せられんことを乞ふて其眞情を現はすは實に尊むべきの事なり、

會場の如何に論なく一夕を過さんとて、他より招待を受くることあらば、不在又は天候に托し之を辭するとあるべからず常に自己の招待を受けたる約束を遂ぐるに力を注ぐは最も褒むべきものなり、自己の事情に差支なきも、費用の都合惡きことあらば、是非共支拂を要する名譽の負債と思ひて、他の費用を節しても之を支出せよ、如何なる場合を論ぜず紳士淑女より受けたる招待の如く、己れを利するの大なるものあらずと記憶せよ、

第十七章　宴會に於ける談話

宴會の席上來賓皆未知の人なるときは、談話の才ある人も其力を揮ふに頗る困難なるべし、

左れど主人公又は家庭の性質よりして、來賓の性質如何を斷ずるに難からざるなり、換言すれば來賓は非常なる當世風の人物なりや、保守主義の人なりや、尊敬すべき人物なるやを卜することを得べけん、又宴會の性質にありても婚姻に因りて新に親戚となりたる人が興業の道を講ずるものなることあるべく、或

は交際社會に出入せざる極めて内氣靜穩の人の集會なることあり、外交家、宗敎家の會たることあるべし又其家の主婦は佛語に長じたるもあるべく、其夫は米國流の獨逸語に達したるものもあらん、或は職業ある前途多望の靑年の集會たるべく、或は一角の名譽ある人物の宴會たるべく、或は新聞記者、陸海軍人地方人士の宴會たることもあらん、斯の如く主人と來賓に就て判斷する所あらば、自己と宴席を同ふする來賓全般の性質に就て大凡そ判定し得らるべきものならずや、

若し來賓にして高等の敎育ある人ならば、一層寬厚の量を表はし、互に交際するに於てもいと平易にて、絕へて未知人たりと

の體裁を示さゞるものなり、故に其宴席は決して活氣を缺ぐことあらず、況んや、主人は自己と性質を同ふする人と席を連らぬるに至らば、之が爲め談話に花を添へて來賓に興奮を與へ、折々の沈默は却て一層光彩を添ゆるの具たるべし是れ主人の斡旋一つにあるなり

己れ遠慮深く見ゆる婦人の傍に坐せば、食事の進行を誤らぬ樣些末の事迄も深く注意して、時事問題其他の事に說き及ぶべし、斯かる時にありては些細の事を語るも非常に助けをなすものなり、又己れ獨り語るのみならず、己れの知れる事に就き隣席の客に語らしむる樣力むべし、先方が之に對して熟通せるを見ば、

▲宴會に於ける談話▼

温言にて益〻談話の進行を奬勵せよ、若し其人多く語る所なくば、他の問題を語るべし、適當に開拓を加ふれば何物も生長せざるの土地なきが如く、婦人にありても、何事をも語らざるものとてはあらざるべし、席上呼物の人物あれば田舍僧侶たると然らざるを問はず、其人に對して何事か語らんことを望むは禮に協へるものにて、婦人をして其旅行談、見聞したる名士談を語るべく誘導することこそよけれ、左れど直接間接を問はず、自尊心を避けざるべからざるは言ふを俟たざる事なりとす

人或は謂へらく未知の人に自己の實歴談を語るは他人より己れの重要視せらるに於て必要なるものありと、然り己れ若し斯く

て他人を樂ましむるを得ば斯くなすことよけれ、己れの語る所是ならば他人皆之を聞くを喜ばん、要は其事情如何に存す、

予は茲に豫想し得べき心苦き極端なることの宴席中に起ることを述べん、そは遠慮勝ちの婦人又は用心過ぎて談話の勞を他に任かする人あること是なり、斯かる場合にありて過度の遠慮をなすは、其罪輕からぬものにて、是れ寧ろ主人に對して不親切、來賓に對して輕侮を表するものなれば決して褒むべき業にあらず、又別に遠慮せざる人に向ては之と談笑を共にすべし、斯かる場合に際し、己れ聊かにても人物、事情、時事問題、書籍場所に關して知る所あるに、何事をも語らず、又其談柄を擴げ

行かざるは自己の過失として心得べし、されど他人が熱心にて語らんとするを見ば、己れを制して之を聽き、又他人が己れの語る所を聽かんとし、若くは己と共に語らんとするときは、從順親切を表するに敏速なるを要す、

宴席と其他の場合とを問はず、苦憂、惱慮の中より主人を救は人の義務なることを忘るべからず

左に摘載する佛國某著者の批評は主人と來賓とを問はず、常に服膺せざるべからざるものにして、其中無限の教訓あるを咀嚼すべし、

『宴會にありては、單に過度の飲食を受けんが爲めに招待されたるものにあらずして、來賓に對し其才能を表示すべき機會を與へ、未知の人をして熟知せしむる樣其性質を發揮せしむるにあり』云々と

又曰く『食堂に入りて目擊したる、千百の瑣事に就き、己れ確乎たる意見を有せざれば、靜かに之を熟省し薫陶良き人の爲す所を見て之に倣ふべし、品位ある人の要素は、必ず食卓の席上若くは其他好伴侶の集まれる所に於て現はるゝものなれば、己れも之に見習ひ、殊更斯く爲さんとする風を現はさずして、極めて簡潔、適切に處置し得べきこと極めて容易なるものなれば也』

語に言はずや『食卓は紳士の試驗石なり』（"*The table is the touch-stone of a gentleman.*"）と、如何にも幾微の妙を穿ちたる言なり、左れば社會の他方面に於て巧みに野卑の行爲を隱し得る人も、宴席に於ては直に其本性を現はすに至るものなり、

第十八章　沈默の人と憶病及其匡正法

世には極端の無口を守りて無作法に至るをも顧みざるものあり諺に『言語は金の如く沈默は銀の如し』（"*Speach is golden and silence is silver.*"）とあるも、此輩は銀を變じて眞鍮となす

ものならずや、

青年輩往々此種の陰鬱、沈默の風に陷ゐり、謂へらく是れ品位高き謙讓なるものなりと、天下豈に斯の如き謬想あらんや、他人己れと知己たらんことを望むべき意を表せるに際し、之をして談話の全部を負はしむるの止むなきに至らしむるは、畢竟自己が無作法の極なるものにして、到底其罪を免るゝものにあらず、

夫れ善く談話法に通ぜるものにして我が意志又は行爲を適用せざるが如き人は、是れぞ謬想的利己的冷淡の人物たるに過ぎざるのみ、要するに沈默を守るは品格を高むべしとの感をなすも

のは『外見必ずしも内心と等きものにあらず』の言に過ざざるものなり、然るに婦人の大多數は謂へらく、交際場裏に立ちて沈默を守るは充分注意したる結果なりと、此種の事を爲すものにありても、一旦自己と同種類の意志薄弱、思慮淺薄のものに遇へば、忽ち口動き舌飛び憚る所なく語れども性格を異にせる他人と接すれば因却して口を鎖し、尤も不快なる啞者となるものなり、左れば彼等にして時ありて口を開くに當りてや、他人が自己と意見、議論を異にするに就き極度まで主張して、全部の人に不快の感を殘すに過ざず、熟錬なる談話家も此輩を處するに忍耐と善良なる性質を表示せざるべからず、彼は此輩を

見て心地善き感を起さんも一言も自己の成功を示すべきものなきを見て後に必ず大に驚くならんも、此人にして屈することなく何處迄も我慢强く其義務とする所をなさば必ずや其成功を期すべき也、又世上性質善良、教育ある青年にして、己れが遠慮と赤面の爲めに困み、其極之が習ひとして心的病狀を呈するものあるは往々見受くる所なり、然るに両親たるもの之に心附かずして、『追々消え失せるならん』と思ひ、之を自然の匡正に一任して顧みざるものあり、是れ外形上消え去るが如く見ゆるも其實體裁を變じて虛裝となり厚顏となるものにて、其害毒は生涯に亘り、人生交際場裏に尤も必要なる信任と程良き確心を欠

くに至るものなり、此の弊を匡正せんとせば兩三の知友を撰んで談話法の實施に力を注ぐに於ては必ずや其効果の見るべきものあらん、

親切なる情緒ある人こそ眞個熟錬せる談話家たるに至るべきものにて、斯かる人は、他人の無口を制し、之をして心地善く談話せしめ、其交際社會に入るべき障害物を破壞するに力むるものなり

親密ならぬ人に對しても、多く口を開きたること尠からぬに、猶且つ啞者としての非難を受くるものあるは往々あれども、予は此の『沈默なる婦人』、『啞の少年』こそ饒舌喋々として取る

に足らぬ事を語る人に優るや遠しと信ずるなり

若し交際社會に立ちて未知のものと會見するに憶することあれば、平素己と何の苦もなく語れる人物が集合したるに過ぎずと心得置かば何の苦慮する所もあるまじ、己れ他人と均しく發表すべき意見ありて、其外形亦見苦しからぬ時は、心を靜め氣を强ふして己れも之を試むるべし、斯くすれば何の苦もなく處理し得ると、彼の水泳術を學ぶが如く、始めて飛び入るも危險なきは決して想像説にあらざる也、胸中如何なる事起るとても決して頓着するなかれ、若し或る交際社會に於て、己に對し極めて冷淡に、或は直接己を苦むることあるも決して懸念するな

▲沈默の人と憶病及其匡正法

かれ、就中之に向て復讎するが如きことあるべからず『此輩に傚ふて事を爲すを避けんには、交際術に於ても遙に彼等を凌駕し、世上より尊崇せらるべき人物たるに至るべきの時機の必ず來るべし』てふ確乎不動の眞理を以て自ら慰藉する所あるを要す、若し夫れ交際場裏に於て費したる一夕は、善く之を利用するに於ては社會に立ちて一大成効を期すべき助力たるものなるや明か也

第十九章　正確の言語

正確の言語を用ゐるは、交際社會に成功すべき第一の要素なり

此の目的を達する手段として常に文法、辭書を參照して非常の言、誇張の語を避くるを要す

己れ教育充備せる友人に富めば、之に就て我が言語上の欠點を矯正せられんことを求むべし、教育不充分にして又教育ある先輩に接觸すべき機會なき人は、自ら顧みて驚くべき言語を發することく往々あるべし、言語使用の不完全を以て區々たる細事として放棄する勿れ、品位ある社會に入りては、些々たる不正確の言語も我身に取りて一大不利益たることを悟るなるべし、如何に伎倆ありとも、如何に富有の身たりとも、自己の無學を表示する言語、偏僻の結果に對抗すべきものにむらず、己れ若し正

▲正確の言語▼

しく談話せば、如何なる社會に立つも相當の地歩を占むべき素養を作りたるもの也、一旦正確に談話し得べき域に進まんか、如何なる人と對話するも憶するに及ばざるを覺にん、そは我が話したる言語は已に他より鄭重を受くるの價あればなり、己れの言語にして誤謬不適當のことなくば他人の尊敬を受くるに足る人なるや明か也

言語矯正の方法としては、両三の親友と相會し順番に朗讀すること最も益あり、書中の一章を撰擇して辭書の力を借り、一語一句の發音、アクセント迄も正すべし、初めの間は毎章少くも六回以上反覆熟讀せんには必ず其困難に打勝つに至らん、

若し之に加ふるに簡易の論文等を認めて知人の批評、修正を乞はゞ、我が言語上の進歩は一層顯著の域に進まん、

男女を問はず、俗語を使用する事の絶體的不適法なるを悟るもの甚だ尠きは嘆ずべきことならずや、成程俗語の多くは、充分意味あり、又諧謔を含むものなるは、吾人の知る所にして、吾人が正確の思想、鋭利の語句を言出するに大困難を感ずるときは、往々俗語を適用するものなれど、是れぞ流暢の言、正確の辭を以て善く談ぜんとする人に取て一大障害たらざるを得ず、

俗語は思考の勞を省くべき『怠惰者の昇降器』なれば、是非とも之を避けざるべからず、故に自ら力めて俗語に代ゆべき同意

▲正確の言語▼

義の言語を用ふべきことを期せよ、己れの思考を決定して之を文法に合すべき言語にて表示するを要す、常に純潔の言を用ふる人は決して俗語を用ひざるものなる事を忘るゝ勿れ、

簡單、正確の言語を以て容易に談話する青年は、物質的に於ても亦好運、名譽を博するに足るべき資格を失はざるもの也、彼の〜ンリー、クレイを見ずや、彼が天才を發達せしめたるものは、幼時より力めて正確純潔の言を語りたるに因ると言ふにあらずや、斯の如き習慣を養成するは、品性の强健なるを示すものにて、何れの社會にも容れられざる所はあらざるべく、之に反して俗語、背文法、地方語を用ゐるは往々心志薄弱、自負

主義の卑賤なる人物と思はるることあり、

婦女子にして、談話中に停止、或は微笑を洩らして俗語を使用し、他より引抄、若くは申譯の記號となすことあれども、こは容赦し難き欠點なり、左れば何れに行くも常に野卑不正確の言語は決して口にせずと固く決心するを要す、斯の如き習慣を養成せんか、己れ若し頓智の才あらば之を純良、雄健の言語にて語るの優れるを悟るべく、自己豐美の思想を善き言語に現はさば他人に感動を與ふの大なるを知るに至らん、善き教育ある人と談話するの機に乏き人に向て書籍中に散見するも、實際交際社會に使用されざる言語を避くるを望むは頗ぶは困難たるべ

▲正確の言語▼

し、故に讀者は小說を讀んで知らるゝ如く、最上の小說には、世上に擯斥せらるゝ調子にて書きたる問答さへ挾まざるにあらずや、

俗語使用の賤劣なるは已に述る所に就て見るも明かなれども、殊更俗語を避けんとするの體裁外に見はるゝは亦忌むべき事なり、故に他人の疑念を起し易き言語と心附かば一切之を避くること最も安全なるもの也、蓋し一言一句の使用も、人をして己れが敎育ある人物たらしむべく思はしめんとせば極めて簡潔の言辭を擇むを善しとす、

己れ發音の正確なるを疑ふべきものは、一言たりとも使用するなかれ、己れ心に疑はしく思はるゝ問題は必ず失敗をなすものなれば也、

外國語に通せざる人に向て、外國語を使用するは野卑なり愚なりと心得置くべし、

青年輩往々妄信をなして謂へらく、演劇は優雅なる作法の學校たるのみならず又善良なる言語を學び得べき所にして、演劇に使用さるゝ言語は之を日常の談話に用ひて差支なしと、噫斯の如き謬妄の大なるものあらんや、見よ今日英米兩國に於ける演劇は必ずしも良社會の作法のみを演ずるものに限らざるにあらずや、吾人は娯樂場として必ずも觀劇を禁ずるものにあらざ

▲正確の言語▼

れども、こは是れ滑稽、諧謔の興行場に少しく優れるものとし見るのみ、故に予は觀劇上自己の言語、生命の指導を得んとする青年は寧ろ憐むべきものなりと言ふに憚らず、是れ必ずしも予の放言に非ずして多年良優の演じたる戯曲を觀たるの結果此言をなすものなり、假りに百歩を讓りて俳優が正確の言語を話すとするも、彼等が舞臺上に於ける虚構の擧動作法を取りて之を日常實地に適應せんは寧ろ滑稽ならずや、俳優の職は人生に於ける呆大の事を捉へて一層之を誇張するにあれど、善良なる教育の範圍は却て之を抑制するにあればなり、殊更ら優美の言語を弄して他の賞讃を博せんとするなかれ、之

が爲めに虚裝の色外形に現はるゝは免がるべからざるものにして、一見最も嫌厭の感を生ぜしむ、

之を要するに談話の美なる點は、流暢自然なるにあり、上品、優雅を虚裝して思想を現はさんとせば、自から澁滯に至れるは免るべからざる事なり、苟くも談話法に成功せんと欲するもの三省する處なくして可ならんや

交際談話術 終

大正七年三月五日印刷
大正七年三月廿日發行

交際談話術

〔定價金五拾錢〕

著作權所有

著者　蘆川忠雄

發行者　大阪市西區阿波堀通一丁目四十三番地　井上寅之助

印刷者　大阪市西區阿波座上通三丁目九拾番地　余部留吉

發行所　大阪市西區花屋橋南詰　出版書籍業　井上盛進堂
（振替口座大阪三一二八五番）

(空前絶後の大好評重版亦重版)

惚れさせるまで

成功秘訣『人心收攬術』はどんな無粋なお方でも五分間あへば必ず無我無中に惚れさせる秘訣である、世の中に自分より以外の人を自由に惚れさせる事が出來るとは實に痛快ではないか、薬品や氣合を持ちいずして此本を讀んだだけにて對手の人がこちらへべタ惚れに惚れてくる、本書は其の惚れさせる極意である、これを男が應用すれば女が惚れる商人が應用すれば客が惚れる藝者娼妓が盛んに本書を愛用するのも無理はない、勤人奉公人が應用すれば、立身出世は思のまゝであるから、ことに附録の男女交際術の秘法新發見握手法とき てはたまらず其功能の絶大である事はスグどんな相手でもビリビリと、まいつてしまふ、まことに、空前絶後の新發見である、切れた縁でもこの握手さへ一回出來れば、キットヨリをもどさせる事が出來るまして初心者に對するにをいてをや、天下の醜男子敢てらくたんを要せず汝等の爲に最大の武器出づ

數名美人寫眞入ポケット形天金美本
特價三十五錢
密送料四錢

評判の粋な新刊

おまじない
おみくじ廓雀

白玉稲荷、生駒聖天、法善寺金比羅樣、其他各所の靈驗あらたかなるおみくじを集め、數百編の新作舊作都々一と、粋のみなかみ藝者衆が命となづく百發百中、まことによく當るおまじないを附錄としてそへあれば、どんな無粋なお方でも一讀なされば、スゲ通人となる事が出來る、花柳界は勿論直接お客に接する商賣の人々の此の本を愛用する事一方ならず、近來まれなる珍本實行實に飛が如く正に天下一品の觀あり、ことに數百名の美人寫眞ときてはたまらず、本書愛讀諸君のきもつたまを天外に飛ばさんばかりに大阪南地、堀江、新町、北陽の若き藝者の大揃い、此の寫眞の人々の懐中にも此の本が秘藏されてあるのだ、みなさんも懐中刀として此の本をお買上げくだされたい、遊ぶ時にも此の本あれば、各々交際を温くする事奇妙々々。

數百名美人寫眞入
特價金三十五錢
送料金四錢
意氣なポケット形天金

發行所 大阪市西區花屋橋南詰 書籍出版業 井上盛進堂
(振替口座大阪三一二八五番)

歡迎　（浪六先生新著）　湧如

空村　前上　絶浪　後六　の先　一生　大會　奇心　書の　出傑　づ作

明治大正を通じて文壇の大立物として驍名高き昔ちぬの浦今村上の浪六が氣性に似たる筆の趾世態人情外樣々を輕快にして深酷なる筆法で無遠慮に書きなぐり、世に出だせしを例の筆法の大膽にして露骨なるが呼びものとなり我も乃公もとあらゆる人に珍書出來と歡迎せられ見る〳〵うちに數千部江戸名物の火の手の如く四方八方に賣れ廣がり內容の面白さに評判が評判を生み一層の賣行日々發行主が注文發送に殺到せらるゝ有樣さすがに浪六先生苦心の著一大奇書の名にそむかず讀めば涙の出る程面白き狂歌集の新刊評判評判

浪六先生が十年間自慢の狂歌集

浪六先生自ら曰く有用の書を捨て無用の閑文字に生を送る事數十年すぐなる本歌を捨てゝ曲れる狂歌に耽る事こゝに十年身も心も世のいたづらものとなりてと例の遠慮會釋もなき禿筆の搔き廻し振り小說以外に浪六張の狂歌で新天地を作らむと先生會心の十年間の傑作を世に出す次第、小說で讀書界を震撼させしは二十餘年の昔今又浪六一流の狂歌讀書界を風靡せんとす。何人もぜひ讀め、この面白く且つめづらしき浪六先生の筆に成れる狂歌集を

××袖珍ふところ持ち美本
××浪六好の極く美裝
××定價　五十五錢
××郵送料　六錢

31
597

終